

吉野町文化財調査報告 第6集

奈良県吉野郡吉野町

宮滝遺跡 第67～70次発掘調査概報

—史跡宮滝遺跡の整備にともなう発掘調査—

令和7年3月

吉 野 町

序

奈良県吉野町宮滝にある史跡 宮滝遺跡は、吉野町のほこる大切な文化財のひとつです。このたび、その整備に向けて、平成 27 年度から 30 年度にかけて吉野町がおこなってきた発掘調査の概要報告を刊行する運びとなりました。

思い起こせば平成 31 年 3 月に行われた宮滝遺跡第 70 次調査での現地説明会の際、私自身も発掘現場を視察しました。その時に感じた、「飛鳥～奈良時代にあった吉野宮跡とされる宮滝遺跡の資源を活かし、未来へ引き継ぐ公園整備をすすめていきたい」との思いは、今も変わりません。この度、私も現地をみた発掘調査の成果概要がまとまり、刊行できることをうれしく思います。

宮滝遺跡の整備については、令和 2 年 3 月に『吉野万葉整備活用基本計画』を、令和 4 年 3 月に『史跡宮滝遺跡 保存整備基本設計』を策定するなど、町として、これまでも積極的にすすめてまいりました。また、宮滝遺跡のある中荘地区の自治協議会でも、遺跡整備に関連した取り組みを進めていただいております。官民連携して動いているところです。

『古事記』『日本書紀』『万葉集』などに記された古代吉野の姿を感じていたけよう、本書刊行をきっかけに、宮滝遺跡の整備事業に邁進していきたく思います。また、本書を通じて多くの方々に宮滝遺跡のすばらしさを改めて感じていただき、現地や吉野町にお越しいただけることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行にあたり、多大なご支援・ご協力をいただきました、文化庁、奈良県文化財課、奈良県立橿原考古学研究所、吉野万葉整備活用検討委員会、宮滝自治会ははじめ、関連する諸機関ならびに関係各位の皆さまに心よりの感謝を申し上げます。

令和 7 年 3 月 31 日

吉野町
町長 中井章太

例 言

1. 本書は吉野町教育委員会が実施した、奈良県吉野郡吉野町大字宮滝に所在する史跡宮滝遺跡の整備を目的とした発掘調査成果の概要報告である。発掘調査の実施にあたり、文化庁より歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業費補助金、奈良県の奈良県文化財保存事業費補助金、および史跡等整備活用補助金の交付を受けた。
2. 現地調査の面積と期間は以下の通りである。
第67次：調査面積 290 m²、調査期間 平成 28 年 1 月 26 日～平成 28 年 3 月 25 日
第68次：調査面積 770 m²、調査期間 平成 28 年 11 月 21 日～平成 29 年 3 月 30 日
第69次：調査面積 130 m²、調査期間 平成 29 年 12 月 13 日～平成 30 年 3 月 28 日
第70次：調査面積 305 m²、調査期間 平成 31 年 1 月 19 日～平成 31 年 3 月 29 日
3. 調査体制は、以下の通りである（敬称略）。なお、現在は組織名などが異なる場合があるが、組織名・役職名は発掘調査を行った当時（平成 27 年度～平成 30 年度）のもので記述している（以下、同様）。

調査指導 奈良県教育委員会事務局文化財保存課

吉野万葉整備活用検討委員会

【委員長】

京都教育大学 名誉教授	和田 萃	～平成 27 年度
奈良県立橿原考古学研究所 所長	菅谷文則	平成 28 年度～

【委員】

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 文化遺産部 主任研究員
景観研究室 室長（平成 30 年度役職変更）

奈良大学文学部教授	中島義晴	
奈良インターカルチャー代表	上野 誠	
奈良県立橿原考古学研究所 所長	佐野純子	
関西大学文学部 教授	菅谷文則	～平成 27 年度
宮滝自治会 会長	西本昌弘	平成 28 年度～
	山本康一	～平成 29 年度
	上田秀幸	平成 30 年度～
中荘区長連合会 会長	南坂本達司	～平成 28 年度
	竹田哲三	平成 29 年度～
吉野町文化財保護委員会 会長	森下圭太郎	

【オブザーバー】

文化庁 文化資源活用課 主任文化財調査官	五島昌也
----------------------	------

奈良県教育委員会事務局 文化財保存課 課長 小槻勝俊 ～平成27年度
尾登政司 平成28年度
名草康之 平成29年度～

調査主体 吉野町教育委員会事務局（社会教育グループ）

教育長 上平喜英 ～平成28年度
森本弥寿則 平成29年度～
教育次長 和田圭史 ～平成28年度
芳田賢二 平成29年度～
事務局長 前田宗宏 ～平成28年度
森脇登志男 平成29年度
紙森智章 平成30年度
主幹 池田 淳
事務局長補佐 西田 一
主事、主査 中東洋行（調査担当）（平成30年度役職変更）

4. 調査および本書作成にあたり、以下のとおり業務委託をした。なお、地中レーダー探査および自然科学分析の成果については本書に掲載していない。

第67次：株式会社アート（作業員派遣）、株式会社上田工務店（重機掘削）

第68次：株式会社アクセス（作業員派遣）、株式会社上田工務店（重機掘削）、株式会社アクセス（測量・空中写真）

第69次：株式会社アコード（作業員派遣）、株式会社上田工務店（重機掘削）、株式会社アクセス（測量・空中写真）、株式会社バリノサヴェイ（自然科学分析）、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所（地中レーダー探査）

第70次：株式会社地域文化財研究所（作業員派遣）、株式会社上田工務店（重機掘削）、株式会社アクセス（測量・空中写真）

本書作成：株式会社オリエンタルコンサルタンツ（遺構図面のトレース）

5. 第67次調査では奈良県立橿原考古学研究所にトータルステーションの借用を依頼し、下記の職員に現場で協力をうけた。また、第69・70次調査では、奈良県教育委員会文化財保存課に調査指導のための職員の派遣を依頼し、奈良県立橿原考古学研究所より下記の職員の派遣を受けた（五十音順）。なお、第69・70次調査については同研究所の調査番号を付した。

第67次調査：岡田雅彦、網島 歩、西川加奈子、光石鳴巳、本村充保

第69次調査：岩越陽平、奥山誠義、河崎衣美、齊藤 希、鈴木一議、

（調査番号017114）鈴木明美、廣岡孝信、藤元正太、前田俊雄、宮原晋一

第70次調査：岡見知紀、奥山誠義、河崎衣美、木村結香、木村理恵、

（調査番号018090）齊藤 希、鈴木一議、廣岡孝信

6. 本書に記載した遺構の表記は文化庁文化財部記念物課（編）2010『発掘調査の手引き-集落遺跡発掘編-』による（SA：塀・柵・土塁、SB：建物（堅穴建物以外）、SD：溝、SK：土坑・貯蔵穴・落とし穴、SP：柱穴・ピット、SX：その他）。また、遺構番号を示す場合は、調査次数+当該年度の遺構番号（2桁）としている。なお、調査次数は前岡実知雄・楠元哲夫ほか1996『宮滝遺跡（遺構編）』奈良県立橿原考古学研究所を基本とし、以降は奈良県立橿原考古学研究所（編）『奈良県遺跡調査概報』に掲載された順に調査次数を与えている。異なる調査次数で同じ遺構を検出している場合は、原則として遺構を最初に検出した調査次数を用いた。

7. 本発掘調査に関わる記録類・出土遺物は吉野町（吉野歴史資料館）が保管している。

8. 本書で示す座標値は世界測地系で表示し、平面直角座標系第VI系に拠る。方位は座標北である。標高は東京湾平均海面からの海拔高で標記し、TP+は省略した。

9. 本書に記載した土色および土器の色調は農林水産省農林水産技術会議術会議事務局（監修）2014『新版標準土色帖』（36版）による。

10. 調査の際には、下記の機関および個人から助言および協力をうけた。また、宮滝自治会はじめ、近隣諸氏の協力があった。

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、

網 伸也、小澤 毅、清水昭博、平田政彦、前岡実知雄

11. 調査・整理補助員として、以下の諸氏の参加があった。

家村京子、鎌谷純子、梶本御里、中川佳子、中窪佳子、鍋谷勤子、堀田貴美子、松田佐和子（吉野町会計年度任用職員）、遠藤暁子、福岡礼雄（奈良大学）

12. 本書の執筆・編集は吉野町産業観光課 主査 中東洋行が行った。図面は奈良県立橿原考古学研究所 渡部弘美および中東が作成した。遺物は上述の整理補助員が接合・拓本・図化を行い、トレースは中東が行った。本書編集にあたり、吉野万葉整備活用検討委員会、奈良県立橿原考古学研究所ならびに奈良県 文化財課の指導を受けた。

13. 本書にかかわる調査成果の一部についてはすでに報告されているが、その後の整理作業をふまえて検討した本書の内容をもって、現時点での認識とする。

目次

例言

第1章 宮滝遺跡の地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的・歴史的環境	1
第2節 宮滝遺跡の調査・研究史	4
第2章 調査の経緯・経過	9
第1節 調査の目的・経緯	9
第2節 調査の方法と経過	9
第3節 調査日誌抄	12
第3章 発掘調査の概要	15
第1節 調査区の基本層序	15
1. はじめに	15
2. 西部エリアの基本層序	15
3. 中央部エリアの基本層序	15
4. 北東部エリアの基本層序	15
5. 東部エリアの基本層序	18
6. 南東部エリアの基本層序	18
7. 基本層序についての小結	18
第2節 検出遺構	21
1. 掘立柱建物	21
2. 掘立柱塀	21
3. 石組溝	30
4. 石敷遺構	32
5. 土坑	34
第3節 主な出土遺物	34
第4章 まとめ	36
第1節 SB4101 とその周辺の遺構配置の確認と遺構の年代	36
第2節 想定される旧地形と石組溝による排水の方向	36
第3節 SB4101 について	41
第4節 今後の課題	42

挿入図目次

図 1	宮滝遺跡の位置図 (S=1/200,000)	1
図 2	吉野町内の遺跡地図 (S=1/80,000)	3
図 3	史跡 宮滝遺跡の範囲図 (S=1/4,000)	4
図 4	調査区配置図 (S=1/1,000)	11
図 5	西部エリアの各調査区の主な土層断面図 (S=1/60)	16
図 6	中央部エリアの各調査区の主な土層断面図 (S=1/60)	17
図 7	北東部・東部・南東部エリアの各調査区の主な土層断面図 (1~2 は S=1/60、3~5 は S=1/80)	19
図 8	遺構分布図 (S=1/600)	23-24
図 9	SB4101 平面・断面図 (平面図は S=1/150、断面図は S=1/100)	25
図 10	SB7001 等平面図 (第 68 次調査第 1 調査区北東部および第 70 次調査第 2 調査区合成図、S=1/100)	26
図 11	SA7002、SA7005、SB7006 平面図 (第 70 次調査第 4 調査区、S=1/100)	27
図 12	SA6801 平面図 (第 69 次調査区および第 70 次調査第 1・3・5 調査区合成図、S=1/400)	27
図 13	SA6801 平面図 (北部・S=1/125)	28
図 14	SA6801 平面図 (中央部・S=1/125)	28
図 15	SA6801 平面図 (南部・S=1/125)	29
図 16	SD3601 平面図 (S=1/200)	31
図 17	SX6701 平面図 (S=1/40)	32
図 18	SK6702 平面図は S=1/100、断面図は S=1/50)	33
図 19	出土遺物実測図 (S=1/4)	35
図 20	宮滝遺跡における古代の遺構分布 (S=1/1,200)	37
図 21	今回の調査で確認した SB4101 周辺の遺構配置図 (S=1/500)	37
図 22	各地点の遺構検出面の標高 (S=1/1,000)	39
図 23	石組溝の勾配にみる排水の方向 (S=1/1,000)	40

表目次

表 1	確認されている石組溝と勾配から推察される排水方向	38
表 2	主に奈良時代に確認されている桁行9間・梁行5間の規模をもつ主な建物	41

写真図版目次

P L 1	第 68 次調査
1	遠景 (南から)
2	第 1 調査区 (上が北西)
P L 2	第 68 次調査
3	第 2 調査区 (上が北)
4	第 3 調査区 (南東から)
P L 3	第 69 次調査
5	遠景 (北から)
6	調査区全景 (上が北北西)
P L 4	第 69 次調査
7	SB4101 (北西から)
8	調査区 (東から)
P L 5	第 69 次調査
9	SB4101 柱穴検出状況 (旧・第 41 次調査区内)
10	SB4101 柱穴検出状況 (旧・第 41 次調査区内)
11	SB4101 柱穴検出状況 (旧・第 41 次調査区壁面、南東から)
12	SB4101 北側柱列検出状況 (南西から)
13	拡張区 (北から)
14	SB4101 北西部柱穴検出状況 (南から)
15	拡張区 (南から)
16	SB4101 南西隅柱穴検出状況 (南から)
P L 6	第 70 次調査
17	遠景 (南から)
18	全景 (上が西南西)
P L 7	第 70 次調査
19	第 1 調査区全景 (北から)
20	第 3 調査区全景 (南から)
21	第 2 調査区全景 (上が北)
22	第 2 調査区の石組溝 (北から)

- 23 第2調査区柱穴断面（南から）
 24 第4調査区全景（西から）
 25 第5調査区全景（上が西南西）

PL 8

- 26 須恵器杯 B 蓋（図 19-1）
 27 須恵器杯 B 蓋（図 19-2）
 28 須恵器甕 C（図 19-3）
 29 軒丸瓦（図 19-4）
 30 軒平瓦（図 19-5）
 31 軒平瓦（図 19-6）
 32 参考 宮滝遺跡第 1 次調査出土軒丸瓦・製作痕跡等の確認できる資料
 （左・瓦頭部と丸瓦の接合方法、右・泥への粘土詰め込み時の指圧痕）

第 1 章 宮滝遺跡の地理的・歴史的環境

第 1 節 地理的・歴史的環境

宮滝遺跡の位置する吉野町宮滝は、奈良県のほぼ中央を西流する吉野川（紀ノ川上流域）の北岸に位置する。吉野川は概ね中央構造線の谷部を流れていることが知られるが、宮滝付近は中央構造線の谷部から南にそれ、付加帯にあたる。近年の研究では、四万十帯（大和大学研究グループ 1994）に分類され、付近では緑色片岩や黒色片岩、礫岩、凝灰岩、塩基性岩類、チャートなどが分布する。

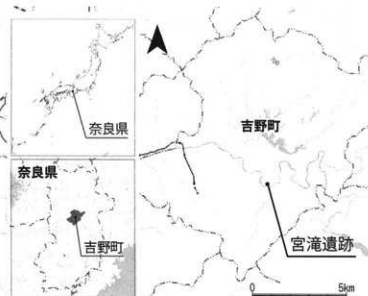


図 1 宮滝遺跡の位置図（S=1/200,000）

宮滝の土地形成にあたっては、宮滝地内にみられる河岸段丘や、宮滝対岸に環流旧河谷（河本 2021）がみられることから、吉野川の堆積・浸食が大きく影響しているとみられる。また、宮滝の北部にある宮滝山の南側山麓には扇状地が発達しており（上治 1944）、宮滝山からの堆積も無視できない。

続いて、宮滝周辺の歴史的環境をみていく。吉野町では、縄文時代になって人々の営みの痕跡が見出せるようになる。町内最古の資料は、宮滝遺跡第 59 次調査出土の押型文土器ならびに柳・田尻区で表面採取された石器（橋本 2020）である。ただし、明確な遺構は確認されていない。もう少し広い範囲で見ると、川上村宮の平遺跡（橋本（編）2003）や下市町丹生川原手垣内遺跡（鈴木（編）2012）で縄文時代早期の遺物や集石遺構などが出土・検出されている。また、縄文時代前期の大淀町大淀桜ヶ丘遺跡（小島 1960）がある。

縄文時代中期～晩期の遺物等は宮滝遺跡（図 2-1・2）で出土している。特に宮滝遺跡の宮滝式は学史に著名で、近畿地方における縄文時代後期末の標識遺跡に位置付けられている（山内 1937、岡田 2008 など）。晩期の遺物は、丹治遺跡（図 2-19）、井戸本遺跡（図 2-24）、南国栖遺跡（図 2-28）、焼神遺跡（図 2-31）などで出土・採取されている（小島 1954）。丹治遺跡はかつて縄文時代晩期中葉に位置付けられた丹治式の標識遺跡であった（小島 1956・坪井 1956）。近年でも、丹治遺跡出土遺物の再整理がなされている（岡田 2011）。なお、町外の近隣の遺跡として、縄文時代晩期の遺跡として大淀町越部ハサマ遺跡（近江（編）1995）がある。

弥生時代の遺跡としては、町内では宮滝遺跡（前期～中期）、丹治遺跡（中期）が知られる。近年、龍門寺跡で弥生時代中期の土器の採取が報告されており、今後、新たな

弥生時代の遺跡が確認される可能性がある(成瀬 2015)。

宮滝遺跡では、近畿地方最初期の確認事例となる壺棺の出土が知られる(末永 1944)。また、町内の弥生時代の遺跡としては、墓域や居住域が確認されている稀有な遺跡でもある。なお、環濠は有していなかったと考えられている(橋本 2003)。

弥生時代後期の遺跡は現状、吉野町内では確認できていない。町外へ目を向ければ、大淀町土田遺跡(豊岡 2003)や大淀町馬佐蔵遺跡(小池 1993)など、丘陵上や吉野川から支流をさかのぼった場所などで後期の遺跡が報告されている(川上 2004)。

古墳時代になると、町内の遺跡数は著しく減少する。丹治遺跡で古墳時代前期の二重口縁壺が表出されている(千賀 1976)ほかは、後期のもつとみられる堂山古墳(図2-15)・林垣内古墳(図2-16)・六軒町古墳(図2-17・18)・南国栖古墳(図2-27)などの古墳が確認されている程度である(松田 2013)。なお、この頃から『古事記』『日本書紀』で吉野についての記述がみられるようになり、応神天皇や雄略天皇の行幸が知られる。

飛鳥～奈良時代には、宮滝遺跡で苑池状遺構(坂 1996、坂 2004)や掘立柱建物群などが確認されるほか(前岡・橋元(編) 1996)、龍門岳中腹に造営された龍門寺(図2-4・5)(浅野・比名子・稲森 1953)や、町外では大淀町比曽に比曽寺が造営される(成瀬 2015)。また、大淀町土田遺跡で池状遺構が確認され官衙的性格をもつ施設が存在が想定されているほか(小池 1993、成瀬 2015)、吉野山地内や龍門岳の麓で当該時期の遺物が採取されており(成瀬 2015)、開発などが行われた可能性が考えられる。この時期の吉野は、『古事記』『日本書紀』『続日本紀』などに記録がのこり、古人大兄皇子の吉野入り、斉明天皇の吉野宮造営、壬申の乱、持統天皇から聖武天皇までの歴代天皇による行幸が知られる。

平安時代になると、『扶桑略記』『御堂関白記』などで、宇多上皇の宮滝御幸や藤原道長の金峯山詣での記録がのこる。龍門寺跡のある龍門岳の麓には藤原期の仏像が複数現存していると報告されており(小林 1953)、その他、宮滝遺跡、吉野城跡、龍門寺跡などの遺跡と史実との関係なども注目されよう。

鎌倉時代以降は、龍門地域にのこる宝篋印塔をはじめとして、町内各所で遺物や石造物が散見されるようになる(浅野ほか 1954、土井 1972)。また室町時代以降になると、大蔵神社庭園や金峯山寺二王門など建物跡や庭園跡も現存する(森 1972、梶井 1972)。

江戸時代になると、吉野山と共に宮滝を訪れた人々の紀行文なども残り、当時の様子がうかがわれる。この時期は宮滝よりも上流域で吉野林業が発達し、吉野川の水運をつかった木材の輸送が顕著になる。宮滝周辺は吉野川の川幅が狭まり、筏流しなどに不便だったことから、一部開削された跡が残る(谷 2008)。こうした林業家たちの活躍は、後に吉野の近代化に大きく貢献した(奈良県教育委員会(編) 2014)。

江戸時代から昭和初期にかけて、宮滝では椿育成や養蚕を行っていたとの記録がのこる(吉野町史編集委員会(編) 1972)。遺跡地には桑が植えられ、長けた桑は伐根機の上で植え替えるなどしていたという。宮滝遺跡の第1次調査を行った末永雅雄は、伐根機で抜かれた桑の根に人頭大の石がからまっていた様子を見たこと記しており(末永 1944)、こうし

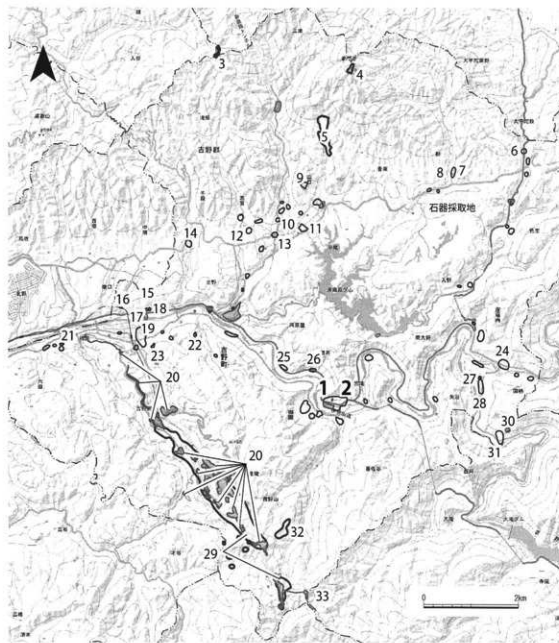


図2 吉野町内の遺跡地図 ※2 (S=1/80,000)

1. 史跡 宮滝遺跡、2. 宮滝遺跡、3. 竜在城跡、4. 龍門山城跡、5. 龍門寺跡(原史跡 龍門寺塔跡)、6. 遺物散布地(24A-0005)、7. 遺物散布地(24A-0002)、8. 遺物散布地(24A-0001)、9. 山口城跡、10. 遺物散布地(18C-0007)、11. 遺物散布地(18C-0006)、12. 遺物散布地(18C-0010)、13. 遺物散布地(18C-0011)、14. 遺物散布地(17D-0004)、15. 堂山古墳、16. 林垣内古墳、17・18. 六軒町古墳、19. 丹治遺跡、20. 史跡名勝 吉野山、21. 六田城跡、22. 飯貝城跡、23. 丹治城跡、24. 井戸本遺跡、25. 遺物散布地(21A-0006)、26. 遺物散布地(21A-0007)、27. 南国栖古墳、28. 南国栖遺跡、29. 吉野城跡、30. 県名勝 大蔵神社庭園、31. 焼神遺跡、32. ヒロノ千軒、33. 史跡 大峯奥駈道

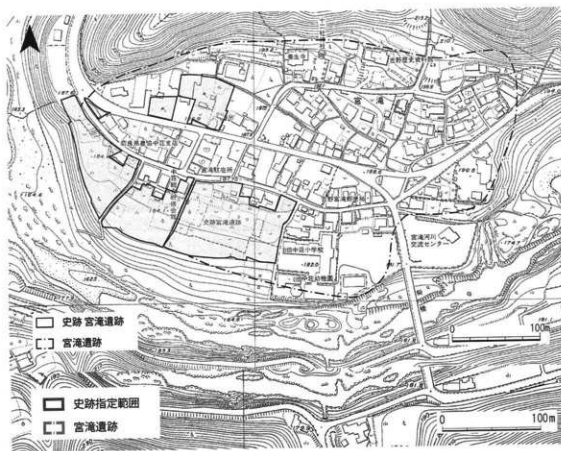


図3 史跡 宮滝遺跡の範囲図 (S=1/4,000) 道3

た宮滝が宮滝遺跡の遺構の遺存度合いに影響を与えている可能性がある。

第2節 宮滝遺跡の調査・研究史

宮滝遺跡は縄文時代早期の遺物を最古とし、弥生時代、飛鳥時代、奈良時代、中世の遺構・遺物が出される複合遺跡として認識されている。ここでは宮滝遺跡の整備対象としている古代の遺構に限って、調査・研究史を整理する (中東 2016)。

宮滝遺跡の古代の遺構は吉野宮跡に比定されている。吉野宮とは、『日本書紀』斉明天皇2年条に造宮記録がのこる離宮である。『日本書紀』及び『続日本紀』には、天武天皇、持統天皇、文武天皇、元正天皇、聖武天皇の行幸が記録されている。

ここで吉野宮という表記について整理しておきたい。『日本書紀』では吉野宮で句讀が統一されているが、『続日本紀』では吉野宮、吉野離宮、芳野宮、芳野離宮など表記が一定でない。これまで吉野町では、宮滝遺跡を紹介するにあたり、飛鳥時代の遺構群を吉野宮、奈良時代の遺構群を吉野離宮と紹介してきた。しかし、『続日本紀』の表記のゆれが意図的か判別できないため、本書では吉野宮に統一した。

さて、この吉野宮だが、『日本書紀』や『続日本紀』には吉野のどこに営まれたのかが記されていない。このため、後世になってその所在地が不明となったようである。その結果、『源平盛衰記』や『宇治拾遺物語』などを参照すると、吉野山が吉野宮跡に比定されていたようである。しかし、江戸時代になって見直しが行われ、『大和志』、『菅笠日記』などで吉野町宮滝、川上村大滝、下市町下市が候補地とされた。

明治になって吉田東伍が「吉野離宮は蓋二所あり、一は国栖村大字宮滝にして一は下市村なり、然れども下市の微證明白ならず」(吉田 1890) と記して以降は、川上村大滝と吉野町宮滝に研究の焦点が絞られていく。明治 19 (1886) ~27 (1894) 年頃には、郷土史家・木村一郎が宮滝を踏査し、遺物を採取していた。この成果は、木村が上京した折に、喜田貞吉に報告していたという (末永 1944)。宮滝が遺跡として認識された最初である。

大正になっても、川上村大滝と吉野町宮滝とを対象に議論が続けられた。大滝説の論者としては水木要太郎 (水木 1904)、宮滝説の論者としては折口信夫 (折口 1919)、次田潤 (次田 1921)、澤瀉久孝 (澤瀉 1923) らがいた。そして、宮滝を擁する中荘村長・山本源次郎が宮滝の顕彰を行っており、私見をノートにまとめるなどしていた (山本 1925)。

昭和になると、郷土史家・森口奈良吉が吉野宮所在地の新説として丹生川上神社社中を提唱し (森口 1929)、宮滝説をとっていた郷土史家・中岡清一と対立する (中岡 1937)。

昭和 2 (1927) 年に奈良県史蹟勝地調査会で激論がかわされた後 (末永 2004)、それぞれに調査・研究を進め、全国誌『史蹟名勝天然紀念物』などで論争がおこる。この時、宮滝説の中岡は自費で宮滝を発掘調査し、石敷遺構を確認している。この発見は、後の岸熊吉による予備調査、昭和 5 (1930) 年からの宮滝遺跡第 1 次調査につながっていく。また、中岡は同じく自費で当時の飛鳥浄御原宮跡比定地 (現: 石神遺跡) を調査しており、飛鳥の石敷遺構と宮滝の石敷遺構の共通性を指摘するなどしている (中岡 1929)。

昭和初期の研究は中岡・森口両氏によって牽引され、中岡・森口両氏それぞれを擁護する論考も多く発表された。喜田貞吉 (喜田 1982)・辰巳利文 (辰巳 1929) らが中岡を擁護し、豊田八十代 (豊田 1932) が森口を擁護した。こうした中、昭和 5 (1930) ~13 (1938) 年に末永雅雄による宮滝遺跡の発掘調査が行われた。その成果は、『宮滝の遺跡』(末永 1932)、『宮滝の遺跡 略報第二』(末永 1934) などを経て発表され、昭和 19 (1944) 年に『宮瀧の遺跡』(末永 1944) としてまとめられた。この成果により、宮滝遺跡は「吉野川北岸の河岸段丘上の遺跡で、広潤な地域にまたがって (中略) 各時代の遺物を包含する山地の遺跡」と評価され、昭和 32 (1957) 年に図 3 の範囲が国史跡の指定を受けた (奈良県教育委員会 1972)。その際、地元との協力を得るために郷土史家の橋本清左衛門氏の尽力があった。

『宮瀧の遺跡』以降も吉野宮所在地をめぐる論争は続いた。こうした中、飛鳥京跡などの発掘調査が進み、徐々に古代宮都の実態が明らかになった経過をふまえ、宮滝遺跡の第 1 次調査を担当した末永雅雄が宮滝説を唱えるようになる (末永 1971)。また、吉野宮を宮滝遺跡とした前提で「壬申の乱」の経路が踏査され、『日本書紀』の記述との整

合性が検証された(玉城 1989、菅谷 1994)。

また、宮滝遺跡においては、平成元(1989)年に実施された第41次調査で、中岡や永が確認した石敷遺構で方形に区画されていた地点に掘立柱建物が出た。

さらに、平成2(1990)年の第43次調査では、飛鳥時代の苑池状遺構が認識されるなどの成果があった。これらの成果は『宮滝遺跡(遺構編)』(前掲・楠本(編)1996)としてまとめられ、坂靖によって苑池状遺構が古代庭園の系譜に位置付けられたことで(坂2004)、今日では考古学においても宮滝遺跡が吉野宮に比定されている。

【注釈】

注1 国土地理院 (<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>) の白地図を利用し作成した。

注2 国土地理院 (<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>) の地図を利用し作成した。遺物散布地の番号は、『奈良県遺跡地図』(<http://www.kashikoken.jp/isekimapLL/index.html>) 掲載のものである。

注3 吉野町作成『吉野町全図』(平成25(2013)年測量)を下図に用いた。

【参考文献】

- 浅野清・日名子元雄・稲森賢次 1953『建築史』『奈良県総合文化調査報告書 吉野川流域 竜門地区』奈良県教育委員会
- 浅野清・日名子元春・中村春壽 1954『建築史』『奈良県総合文化調査報告書 吉野川流域』奈良県教育委員会
- 上治寅次郎 1944『宮滝附近の地質調査並に出土石器の材料顕微鏡検査報告』末永雅雄『宮滝の遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第15冊、奈良県教育委員会
- 近江俊秀(編)1995『越部ハナヤ遺跡』大淀町文化財調査報告1、大淀町教育委員会
- 岡田憲一 2008『回廊系土器(宮滝式・元住吉Ⅱ式土器)』小林達雄(編)『総覧 縄文土器』小林達雄先生古稀記念企画、『総覧 縄文土器』刊行委員会
- 岡田憲一 2011『丹治遺跡の縄文土器』奈良県立権原考古学研究所(編)『重要文化財 権原遺跡出土品の研究』権原考古学研究所研究成果第11冊
- 澤瀉久孝 1923『吉野離宮の位置其他』『奈良文化』3号、竹柏会
- 折口信夫 1919『萬葉集辞典』文會堂書店
- 河本大地 2021『地質の成り立ち』十津川村史編さん委員会『十津川村史』地理・自然編、十津川村
- 川上洋一 2004『吉野川流域の弥生時代-山と川の恵みを活かした暮らし-』前掲・松田真一(編)『吉野 仙境の歴史』文英堂
- 喜田貞吉 1982『喜田貞吉著作集』14巻、平凡社
- 小池香津江 1993『土田遺跡』奈良県立権原考古学研究所(編)『奈良県遺跡調査概報 1992年度』第2分冊、奈良県立権原考古学研究所
- 小島俊次 1960『大淀板ガ丘遺跡』『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第十三報、奈良県教育委員会

小島俊次 1956『各地の縄文土器-近畿』『日本考古学講座 第3巻 縄文文化』河出書房

小島俊次 1954『吉野川流域の古文化について』『奈良県総合文化調査報告書 吉野川流域』奈良県教育委員会

小林 剛 1953『彫刻』『奈良県総合文化調査報告書 吉野川流域 龍門地区』奈良県教育委員会

桜井敏雄 1972『社寺』吉野町史編集委員会(編)『吉野町史』下巻、吉野町役場

末永雅雄 1932『宮滝の遺跡』『歴史と地理』29巻5号、星野書店

末永雅雄 1934『宮滝の遺跡 略報第二』『大和石器時代研究』大和上代文化研究会

末永雅雄 1944『宮滝の遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第15冊、奈良県教育委員会

末永雅雄 1971『飛鳥と宮滝』『飛鳥京跡1』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告26、奈良県教育委員会

末永雅雄 2004『末永雅雄が語る 大和発掘物語』(一社)権原考古学協会

菅谷文則 1994『壬申の乱の踏査研究』『権原考古学研究所論攷』18、奈良県立権原考古学研究所

鈴木一謙(編)2012『丹生川原手垣内遺跡』奈良県文化財調査報告書151、奈良県立権原考古学研究所

辰巳利文 1929『編集後記』奈良文化学会(編)『奈良文化』17号、竹柏会大和支部

谷堀兵衛 2008『近世吉野林業史』思文閣出版

玉城妙子 1989『壬申に翔ぶ』読売新聞社

千賀 久 1976『吉野丹治出土の土師器』『青陵』30号、奈良県立権原考古学研究所

次田 潤 1921『萬葉集新講』改訂版、成美堂書店

坪井清足 1962『縄文文化論』家永三郎 ほか(編)『岩波講座日本歴史』1(原始および古代)、岩波書店

土井 実 1972『金石文』吉野町史編集委員会(編)『吉野町史』下巻、吉野町役場

豊岡卓之「土田遺跡」奈良県立権原考古学研究所(編)『奈良県遺跡調査概報 2003年』第二分冊

豊岡八十代 1932『万葉地理考 附録』大岡山書

中岡清一 1929『飛鳥浄御原宮一部発掘二就一』中岡清一

中岡清一 1937『大塔宮吉野城』積善館

中東洋行 2016『吉野宮をみる視点-過去から うたから 調査から-』大淀町教育委員会(編)『平成28年度大淀町地域遺産シンポジウム資料集 吉野宮の現像を探る』大淀町教育委員会

奈良県教育委員会事務局文化財保存課(編)1972『奈良県史跡名勝天然記念物集録1』

奈良県教育委員会(編)2014『奈良県の近代化遺産-奈良県近代化遺産総合調査報告書-』

成瀬匡章 2015『吉野郡内の古代寺院』『研究紀要』第19集、由良大和古代文化研究協会

橋本輝彦 2020『柳・田尻区金照神社参道発見の石器』『たぎつみやどころ』第4号、吉野町文化観光交流

協議文化財保存活用室

橋本輝彦 2003『宮滝遺跡』大和弥生文化の会(編)『大和の弥生遺跡基礎資料Ⅱ 奈良県の弥生土器集成』

本文編

橋本裕行(編)2003『宮の平遺跡1』奈良県立権原考古学研究所調査報告84、奈良県立権原考古学研究所

坂 靖 1996『飛鳥時代』『宮滝遺跡(遺構編)』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告71、奈良県立権原考古学研究所

坂 靖 2004「最近の宮滝遺跡の調査から」増補吉野町史編集委員会（編）『増補吉野町史』吉野町
前関実知雄・橋元哲夫（編）1996『宮滝遺跡（遺構編）』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告71、奈良県
立権原考古学研究所
松田 度 2013「吉野の横穴式石室墳」『研究紀要』第18集、（公財）由良大和古代文化研究協会
水木要太郎 1904『大和巡』奈良縣協賛会
森 蔵 1972「吉野町の庭園」吉野町史編集委員会（編）『吉野町史』下巻、吉野町役場
森口奈良吉 1929『鳥見雷時考・吉野離宮考』木原文進堂
大和大学研究グループ 1994「紀伊山地中央部の中・古生界（その5）[新子地域]」『地球科学』48巻2
号、地学団体研究会
山本源次郎 1925「吉野離宮論（遺構）」『奈良文化』6号、紅玉堂出版
吉田東伍 1890『大日本地名辞書』第2巻、富山房
吉野町史編集委員会（編）1972『吉野町史』上巻、吉野町役場

第2章 調査の経緯・経過

第1節 調査の目的・経緯

末永雅雄による宮滝遺跡の発掘調査後、地元の中庄小学校郷土研究会や中庄村史跡顕彰会などによって精力的に顕彰活動が行われ（中庄小学校郷土研究会（編）1955、宮滝遺跡顕彰会 1969、坂井 1988）、郷土史家の橋本清左衛門による尽力等もあり、昭和32（1957）年7月1日に遺跡の一部が国史跡に指定された。以降、昭和50（1975）年から奈良県立権原考古学研究所によって宮滝遺跡の調査が行われるようになり、昭和58（1983）年からは吉野町が史跡宮滝遺跡の公有化事業を開始した³¹。

こうした経緯をふまえ、吉野町では平成26（2014）年に『吉野万葉整備活用基本構想』を策定し、史跡宮滝遺跡の整備事業を行うことを構想した。この構想を受け、平成26（2014）年度から吉野万葉整備活用検討委員会を組織し、史跡整備事業に着手した。

整備委員会にて『整備基本計画』策定に向けた審議をすすめる中で、整備を行う根拠となる図面の大半が、昭和19（1944）年刊行の『宮滝の遺跡』（末永 1944）であり、遺構の詳細な位置情報等が不足していることが問題提起された。また、整備予定地内で、四面廂建物とみられる掘立柱建物が検出されているにも関わらず、その全容が明らかでないことなどが課題として挙げられた。これらの審議結果を受け、吉野町教育委員会事務局によって平成27（2015）～平成30（2018）年にかけて、遺構の位置情報の把握と、範囲や規模が不明瞭な遺構の確認を主目的とした発掘調査を行った。

第2節 調査の方法と経過（図4）

【第67次調査】

平成27（2015）年度に行った第67次調査では、第36次調査や第41次調査の成果を参考に、第1次調査で報告されている石敷遺構の位置確認や、これまで調査が行われていない場所での遺構の有無を確認するため、10か所に調査区を設けた。

調査では、第1調査区で瓦が出土し、付近に奈良時代の遺構が想定できたこと、第2調査区の拡張区で石敷遺構の一部とみられる石を検出できたこと、第3調査区において第36次調査で再検出されていた石組溝の続き部分を想定通り検出できたこと、第4～9調査区では遺構・遺物ともに検出できなかったこと、第10調査区で奈良時代の瓦などを包含する大型の土坑を検出したことが主な成果であった。一方で、第2調査区で検出できたと想定していた石敷遺構を顕著に検出できなかったこと、第10調査区で検出した土坑の範囲を確認できなかったことが課題となった。

【第68次調査】

平成28（2016）年度に行った第68次調査では、前年度の成果等をふまえ、以下の3箇所の調査区を設けた。第1調査区は第41次調査の遺構検出面の土層を確認した上で、

第41次調査区と第67次調査第2調査区とをつなぐように設定した。設定目的は、第67次調査第2調査区で検出できなかった石敷遺構の面的検出および第41次調査で検出されていたSB4101の西側部分の検出および確認を目的に設定した。第2調査区は、第36次調査区と第3調査区とを結ぶように設定した調査区である。第1次調査で確認されていた石組溝の延伸する範囲確認を目的に設定した。第3調査区は、第67次調査第10調査区の東側に設定した。この調査区では土坑の平面的な検出を目的とした。

第1調査区では、第1次調査で検出されていた石組溝の一部再検出や、未確認だった石敷遺構およびSB6801を検出することができた。一方、SB4101の西側部分を検出することができなかった。また、第1次調査で報告されていた一部の石敷遺構について、再検出することができなかった。第2調査区では、石組溝の範囲が第1次調査で記録されていた範囲を超えないことを確認した。ただし、このことは石組溝の範囲が確定したわけではなく、後世に掘削されたために現存しない可能性が高いことを認識した。第3調査区では、第67次調査第10調査区で検出していた土坑の規模を確認した。

【第69次調査】

平成29(2017)年度に行った第69次調査では、第68次調査が調査面積を広げすぎたことでSB4101の検出に注力できなかった反省をふまえ、SB4101の西側部分検出を目的に調査区を設定した。調査状況をふまえ、調査区を2度拡張した。調査の結果、SB4101の規模を確認した。また、第68次調査で検出したSB4101西側の遺構についても検出することができ、SB4101の西側がSA6801によって区画されていたことを確認した。

【第70次調査】

第68次調査で確認したSB4101が当初想定していた以上の大型建物であり、SB4101周辺が宮滝遺跡の中心部であった可能性が高いと判断できた。このことをふまえ、平成30(2018)年度に行った第70次調査では、SB4101周辺の様相を詳細に検討するため、4か所に調査区を設けた。第1・3調査区は、それぞれSA6801の北限と南限を確認する目的で設定した。第2調査区は、『宮滝の遺跡』で報告されている石敷遺構および石組溝、そして第68次調査で検出したSD6803によって、SB4101の北側に石組溝で方形に区画された場所の存在が明らかになったことをふまえ、同地に建物跡が存在するのかを確認する目的で設定した。そして、SB4101を中心に東西対称に建物が配置されていた可能性が考えられたため、SB3602と対になる建物があるかを確認するために第4調査区を設けた。なお、調査を進める中で、SA6801が第1調査区よりもさらに北に続くことが確認できたため、改めて第1調査区の北側に第5調査区を設けた。

調査の結果、SA6801は今回の整備予定範囲よりもさらに北側へ続くこと、SB4101の北側に掘立柱建物SB7001が存在すること、SB3602と対となる掘立柱建物SB7002が存在することが明らかになった。

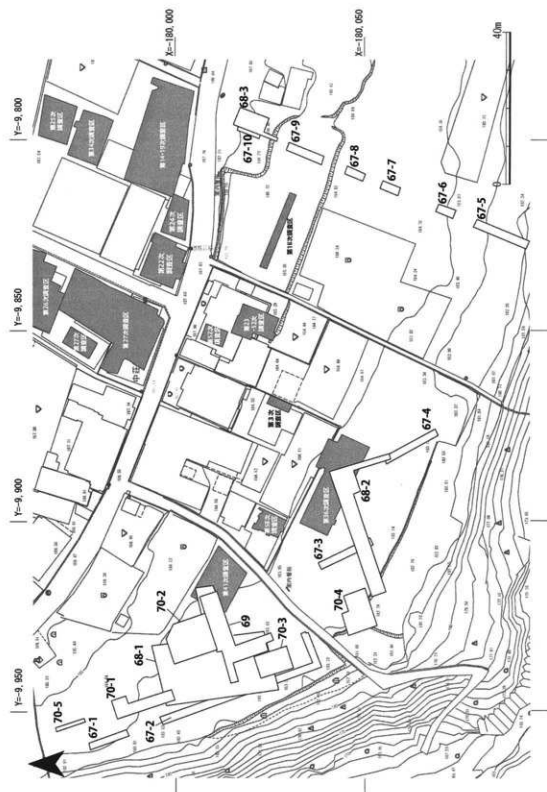


図4 調査区配置図(S=1/1,000) 12

第3節 調査日誌(抄)

【第67次調査】

平成28(2016)年

1月26日 機材搬入し、機械掘削開始。隣接する既調査地では、地表下30~40cmで遺構検出面に達していたため、掘削深度30cmを目安に、石の無に留意しながら掘削を進めた。67-1~5調査区では拳大~人頭大の石をまばらに検出。木の根により67-10調査区では機械掘削が難航したが、掘削土中に瓦片などが含まれていることを確認。

1月27日 遺構検出開始。

1月28日 67-1調査区で拳大の石を3石検出。石敷遺構の可能性を疑う。一方、67-5調査区で検出した人頭大の石は、いずれも擾乱土に包含されており、石敷遺構ではないと判断。

2月1日 67-10調査区で大型の土坑を検出。土層断面の検討から、1月26日に出土した遺物は、この土坑埋土中に包含していたものと判断。

2月2日 67-2調査区の遺構検出を完了。検出した数点の人頭大の石は、いずれも面がそろっており、石敷遺構に伴うものではないと判断。同調査区内で、黄褐色の粘土を局所的に検出。古代の整地などに伴う可能性を疑う(後に擾乱土であると判明)。67-3調査区では石組溝の底石とみられる石列を検出。

2月4日 67-10調査区で検出した土坑を精査。この土坑には飛鳥~奈良時代の土器や瓦が包含されていることを確認。この結果、67-10調査区を設定した舌状に出っ張る地形は後世の造成でなく、周囲が削られたことで出来たものと判断。

2月15日 文化庁 五島調査官現場視察。

2月16日 67-2調査区を拡張し、SX6701を検出。

2月25日 吉野万葉整備活用検討委員会では掘削の経過を報告。

3月2日 67-9調査区の検出面が礫を非常に多

く含む、他調査区と土の様子異なるため、調査区西側にサブトレッチを設けて層序を確認。

3月3日 67-8調査区の検出面が粘質土で、他の調査区と異なるため、調査区西側にサブトレッチを設けて層序の確認を行う。

3月8日 67-4調査区南端で礫が多くみられたため、一部たち割をいれる。また拳大から人頭大の石が出土し、石がまとまって投棄された擾乱と判断。

3月15日 吉野万葉整備活用検討委員会開催。

3月25日 埋め戻し完了

【第68次調査】

平成28(2016)年

11月21日 機材搬入。68-1、2調査区の掘削を開始。第41次調査区および第36次調査区の埋戻し土を確認。

11月23日 68-2調査区の第36次調査区との重複箇所では一般者を対象とした発掘体験の実施。68-2調査区で石敷遺構を検出。

11月28日 68-2調査区の途中で石列が途切れる事を確認。断続的に石列が検出されるため、広い範囲で後世の擾乱をうけているものとみられる。

11月29日 68-1調査区で第1次調査の埋め戻し土とみられる土層を確認。

12月9日 68-2調査区で第36次調査区の埋め戻し土の除去を完了。

12月22日 吉野小学校・吉野北小学校の児童を対象とした発掘調査体験の実施。

平成29(2017)年

1月17日 68-3調査区掘削開始。

1月27日 吉野万葉整備活用検討委員会開催。

2月9日 遺構検出写真撮影。

2月10日 検出遺構の調査を継続。また、SB4101

の柱掘方の検出を目的とした精査を実施。

3月14日 吉野万葉整備活用検討委員会。

3月23日 空中写真撮影。SB4101 想定地の西側に、南北方向にのびる遺構を認識。

3月25日 現地説明会開催。

3月30日 埋め戻し完了。

【第69次調査】

平成29(2017)年

12月13日 現場準備。

12月16日 重機掘削開始。

平成30(2018)年

1月12日 SB4101の西側部分の検出を想定していた箇所で擾乱を検出。

1月24日 吉野万葉整備活用検討委員会開催にむけ、委員長と発掘調査について相談。

2月1日 掘削の断面が事業調査区の断面にかかわるため、断面精査での検討継続。精査時に土器皿片や陶磁器片が出土したため、中世以降の擾乱と判断。

2月9日 奈良県立橿原考古学研究所による現場指導を受け、調査協力を依頼。職員の派遣の承諾を得る。

2月26日 旧第41次調査区内を精査し、第41次調査時点で認識出来ていなかった柱穴を新たに検出。また、柱穴が複数重複していることや、遺構と整地土とを判別する際の留意点(遺構には黄褐色土がブロック状に混ざる)を認識。この結果を受け、第41次調査区の西側部分を、掘削をしながら畦を残して段下げを実施。

2月27日 段下げした範囲で第41次調査の西側続き部分となる柱穴を検出。遺構検出面を基準に掘削を進める。掘削途中、瓦器が出土。遺構面が検出できていなかったことを確認。

3月7日 調査区を西側に拡張。調査区内で、

SB4101がおさまると判断。

3月13日 再度調査区を西側に拡張。

3月14日 吉野万葉整備活用検討委員会開催。また、第68次調査で認識した大型建物西側の遺構は、掘立跡であったことを確認。

3月19日 調査区を南側へ拡張。

3月22日 調査区をさらに南側へ拡張。

3月24日 現地説明会開催。

3月25日 SB4101南端の柱穴検出。

3月27日 土層断面の一部剥ぎ取りを実施。

3月28日 土層剥ぎ取り完了。埋め戻し完了。

【第70次調査】

平成31(2019)年

1月19日 第1調査区と第2調査区の掘削を開始。1月28日 本日より奈良県立橿原考古学研究所の現地指導を受ける。

1月29日 埋め戻し土の除去と遺構検出を始める。2月12日 精査の結果、第2調査区で柱穴など検出。柱筋などが整合しないため、重複する遺構などを認識している可能性を検討。

2月16日 第4調査区の掘削開始。

2月20日 第1調査区の精査開始。

2月21日 第1調査区、ほぼ検出終了。

2月22日 奈良県立橿原考古学研究所の現地検討会。

3月2日 第4調査区の精査開始。

3月4日 第3調査区の掘削開始。

3月6日 第4調査区で掘立建物の柱掘方とみられる遺構検出。

3月12日 第5調査区の掘削開始。

3月13日 第3調査区の精査完了。

3月23日 現地説明会。

3月25日 吉野万葉整備活用検討委員会。

3月29日 埋め戻し完了。

【注釈】

注1 史跡指定後の宮滝遺跡の経緯については池田淳氏よりご教示いただいた

注2 下図には吉野町教育委員会が平成30(2018)年に作成した宮滝の地形測量図を用いた。

【参考文献】

坂井義雄 1988「宮滝の遺跡(吉野離宮)」『吉野の文化財紀要』4、吉野町文化財保護委員会

末永雅雄 1944『宮滝の遺跡』奈良県教育委員会

中庄小学校郡土研究会(編) 1955『中庄管見』

宮滝遺跡顕彰会 1969『宮滝』

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の基本層序

1. はじめに

本調査地では基本層序として大きく4層にまとめることができる。Ⅰ層：表土および近現代耕作土・造成土、Ⅱ層：中世遺物包含層、Ⅲ層：古代整地層、Ⅳ層：地山、である。

本書で報告する調査地が東西約150m、南北約90mと広範囲のため、場所により基本層序に差異がある。本書では本調査地を大きく5つのエリアに分け、基本層序の様相を整理する。

なお、主な遺構検出面であるⅢ層より下層の確認状況は調査区により異なる。必要に応じて設けたサブトレンチ内など限られた範囲で確認した場所と、調査区全面で検出した場所の両方が含まれることを断っておく。

2. 西部エリアの基本層序(図5)

西部エリアは、第70次調査第5調査区から第70次調査第3調査区までが該当する。後述する大型建物などを検出したエリアで、Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層を確認している。Ⅳ層以下はサブトレンチ内、旧調査区内などで部分的に確認している。

Ⅰ層は黒褐色砂混じり粘質土～オリーブ褐砂質土層で、厚さ20～30cmをはかる。Ⅱ層は暗褐色砂混じりシルト質土層である。第70次第5調査区、第70次第2調査区南側、第69次調査区などで確認している。最大で厚さ約15cmをはかる。ただし、断続的な検出が多く、広い範囲で後世の耕作等による攪乱を受けているとみられる。Ⅲ層は暗褐色～にぶい黄褐色砂質土層などで、厚さはおおむね30cm程度で、最も厚い場所では60cmをはかる。局所的に後世の攪乱を受けている場所をのぞき、当該エリアの全域で確認できた。地点によってはさらに2層にわけることができ、重なっているとみられる遺構も確認した。Ⅳ層は黄褐色～褐色のシルト質または砂質土層である。一部ではラミナがみられ、河川堆積層と判断できる。

3. 中央部エリアの基本層序(図6)

中央部エリアは、第70次調査第4調査区から第67次調査第4調査区までが該当する。このエリアでは、Ⅰ層、Ⅳ層を確認した。Ⅱ層、Ⅲ層は、後述するように石組溝の底石のみを検出している状況から後世に削平を受けたとみられる。第70次調査第4調査区に北接する第36次調査区では石敷遺構や側石などを伴う石組溝が確認されており、10mほど北の地点ではⅢ層が確認できるだろう。

Ⅰ層は黒褐色～にぶい黄褐砂質土層である。第68次調査第2調査区の北端部では40cm程度の厚みがあるが、南に近づくにつれて徐々に薄くなり、第70次調査第4調査区では30cm程度となる。Ⅳ層はにぶい褐色のやや粘質をおびた砂質土層で、下層になるにつれにぶい黄褐色中～極粗砂を多く含む砂質土層となる。

4. 北東部エリアの基本層序(図7)

北東部エリアは、第67次調査第10調査区および第68次調査第3調査区が該当する。この

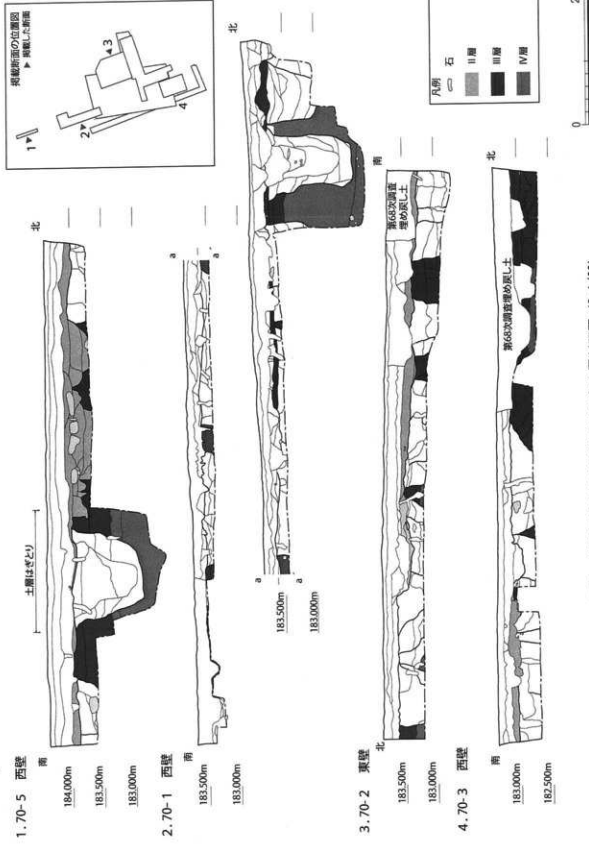


図5 西部エリアの各調査区の主な土層断面図 (S=1/60)

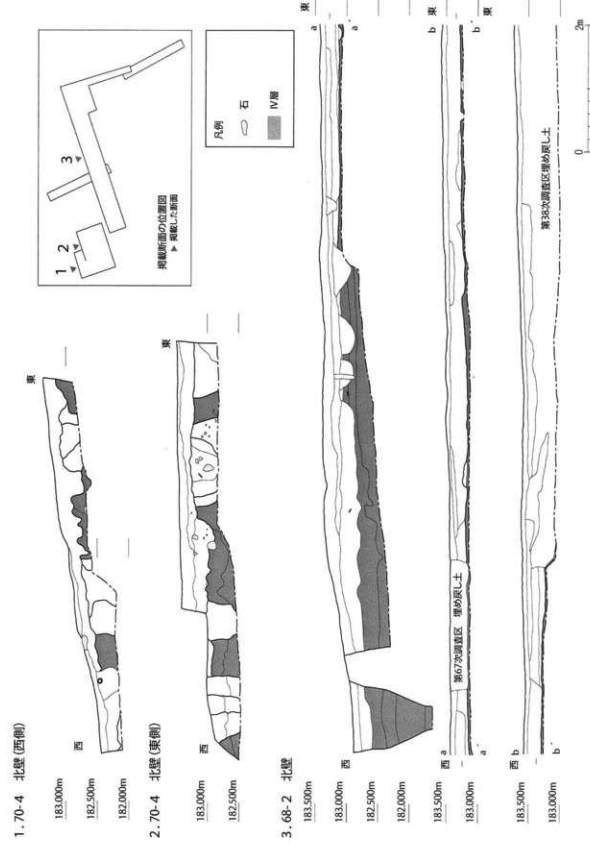


図6 中央部エリアの各調査区の主な土層断面図 (S=1/60)

エリアで確認した層序はⅠ層、Ⅲ層、Ⅳ層である。なお、調査区の南側にある段差部分では、Ⅰ層（表土直下の近現代耕作土）を掘り込んで設置された石積みを確認した。この石積みの北側と南側とは、基本層序の様相が顕著に異なり、調査区の範囲内では、南側でⅠ層しか確認できなかった。このことから、石積みは河岸段丘崖を掘り込んで設置されたものとみられる。

Ⅰ層は黒褐色〜にぶい黄褐細砂〜中砂を多く含む砂質土層で、厚さは概ね20〜30cmをはかる。ただし場所によって厚さが異なり、薄い場所では10cm程度、厚い場所では40cm程度をはかる。Ⅲ層は褐色礫混砂質土である。Ⅳ層はにぶい褐色礫混砂質土層である。この下層に径数mm〜人面大の大きさが不ぞろいな礫からなる層がみられ、段丘礫層の可能性がある。さらにその下層にはしまりの弱い礫混砂層がみられる。

5. 東部エリアの基本層序（図7）

東部エリアは、第67次調査第7調査区から第9調査区までが該当する。このエリア周辺は調査事例が少なく、また遺物の出土もほとんど見られなかったため、調査当時、層序の判断に不安があった。本報告では、第68次調査以降の成果をもとに見直しを行っており、Ⅲ層の面的な調査ができていなかったことを認識した。よって、調査区のサブトレンチなどで確認した層序をもとに報告する。確認できた層序はⅠ層、Ⅲ層、Ⅳ層である。

Ⅰ層は耕作土や造成土が含まれるため、土質が一定でない。耕作土と判断した部分の土質は、にぶい黄褐色の細砂〜中砂を多く含む砂質土層である。層の厚さは一定でなく、場所により20〜60cmをはかる。Ⅲ層は暗褐色砂質土である。遺物が出土していないため断定できないが、西部エリアⅢ層の遺構埋土でみられた特徴を有する土が散見された。この特徴は第69次〜70次調査において柱掘方の埋土に類似しており、Ⅲ層に相当すると判断した。この結果は、同調査地およびその周辺に古代の遺構が存在する可能性を示唆するものとする。Ⅳ層を確認した調査区はきわめて少ないが、褐色砂質土である。

6. 南東部エリアの基本層序（図7）

南東部エリアは、第67次調査第5調査区から第67次第6調査区までが該当する。このエリアでは遺構や遺物が検出されず、表土以下、しまりの弱い砂層がつづく。

このエリアで確認した層序はⅠ層、Ⅳ層である。Ⅰ層は黒褐色〜にぶい黄褐細砂〜中砂を多く含む砂質土層で、厚さ20〜50cmをはかる。Ⅳ層はにぶい褐色砂層である。東部エリアで確認できたⅡ層が確認できないのは、中央部エリアの様相をかんがみて、後世の耕作や削平等のためと想定している。ただし、遺物の出土がほとんど見られないことや、当該エリア南側の河岸段丘崖に近づくにつれて傾斜が大きくなることを考慮すれば、古代において積極的な土地利用がなされていなかった可能性も考えられる。

7. 基本層序についての小結

ここでは、各エリアで確認した層序をもとに、各エリアの関係などについて整理する。

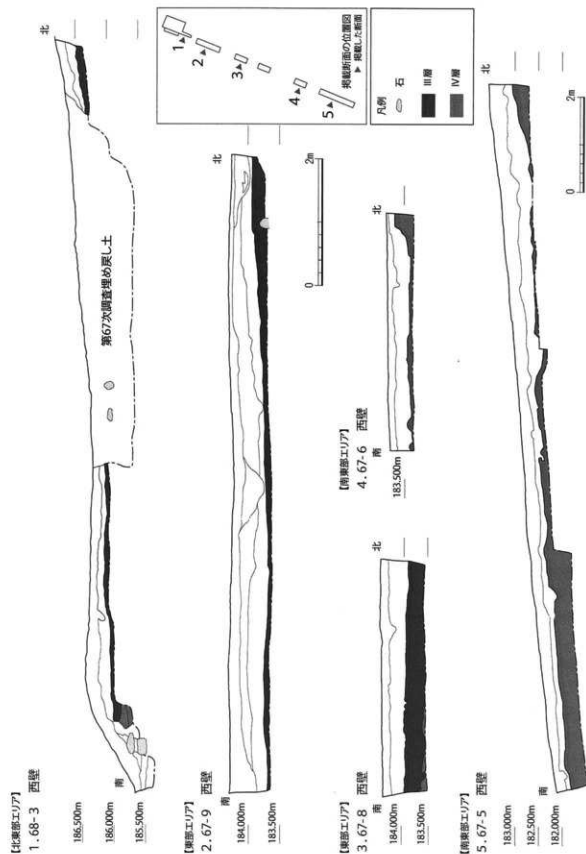


図7 北東部・東部・南東部エリアの各調査区の主なる土層断面図（1〜2はS-1/60、3〜5はS-1/90）

【西部エリアおよび東部エリア】

西部エリアではⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層を確認した。東部エリアについても、Ⅱ層が確認されなかったことを除けば近い層序であり、西部エリアから東部エリアにかけての一带は古代に整地されていた可能性が考えられる。なお、西部エリアは北西から南東にむけて、東部エリアは北から南にむけて傾斜しており、各層序の標準的な標高を数値として示すことが難しい。この点については、本書のまとめで全体的な傾向を整理したい。

今回の調査で注目される点は2点ある。1点はⅢ層が複数時期に分かれる可能性、または複数回の工程を経て整地がなされた可能性が確認できた点である。このことは、後述するように大型建物に先行する遺構が確認できた点とあわせて注目できる。ただし、今回の調査では先行するとみられる遺構の調査を対象としなかったため、詳細は今後の課題である。

もう一点は、西部エリアでもⅢ層が確認できた点である。西部エリアはこれまで調査がなされていなかったため、古代の遺構分布の有無が確認できていなかった。しかし、今回の調査でⅢ層と判断できる層が確認できたことから、古代の遺構は西部エリアにも分布している可能性が考えられるようになった。

なお、『宮瀧の遺跡』(末永 1944)によると、石組溝の20 cm程下層でほぼ完形の弥生土器が出土している。今回の調査では十分に確認できなかったが、Ⅲ層とⅣ層の間に弥生時代以前の遺構面が存在する可能性があり、この確認についても今後の課題である。

【中央部エリアおよび南東部エリア】

中央部エリアおよび南東部エリアでは、Ⅰ層直下がⅣ層となる。これらのエリアではⅣ層を面的に検出したことになるが、調査時の所見としてⅣ層のしまりは悪く、長靴で歩くと足跡がのこるほどであった。

中央部エリアでは石組溝の底石を検出しているため、当初はⅣ層を遺構面と考えていたが、後述するように石組溝に側石が全く確認できず、直上までⅠ層が及んでいたことを考えると、本来存在したⅢ層が後世の耕作等により削平されたものと考えられる。

なお、南東部エリアは遺物がほとんど出土しておらず、遺構が確認できないことから、古代に土地利用があったのかどうかも含めて今後の検討課題である。

【北東部エリア】

北東部エリアは、Ⅰ層、Ⅲ層、Ⅳ層を検出しているが、Ⅲ層およびⅣ層の検出高が他のエリアと明らかに異なる。この理由を考える上で、段丘礫層とみられる礫層が注目される。

従来、北東部エリアの北を走る町道付近に河岸段丘が想定されていた(前岡・楠元(編) 1996)。今回、北東部エリアと南接する東部エリアとの間で遺構検出面の比高が1 m以上あることを考慮すると、北東部と東部エリアとの境界に段丘崖を想定できるだろう。そして、北東部エリアは上位段丘面にあると考えられる。

なお、Ⅲ層について東部エリアとどのようにすり合わせがなされていたのかについては、今回の調査では確認できなかった。

第2節 検出遺構

本報告にあたり、既往の調査で確認されている遺構、および、それと一連とみられる遺構については、その名称を『宮瀧遺跡(遺構編)』に準じた。『宮瀧遺跡(遺構編)』に図示されている遺構で、遺構名がないものについては、新たに遺構番号を付した。

1. 掘立柱建物

SB4101(図9) 第69次調査区にて、第41次調査で検出されたSB4101の西側部分、北側柱列と北入側柱列、西側柱列を検出した。第41次調査の成果とあわせると、東西9間(桁行総長23.7m)、南北5間(梁行総長9.6m)の四面南建物である。柱間は桁行が2.7m、梁行が1.8m。梁行方向の入側柱列と側柱列間は2.4m、桁行方向の入側柱列と側柱列間は2.1mである。国土座標に対する振れは、北に対して西に18.2°である。

検出した柱掘方は、いずれも一辺1.3~1.5mの隅丸方形である。その深さは、第69次調査区の東端で検出した柱穴で約1.1mである。梁行の側柱列で地中梁とみられる布掘を検出した。柱はすべて抜き取られており、遺物は出土していない。

SB7001(図10) 第70次調査第2調査区で検出した掘立柱建物である。SB4101の5.7m北に位置する。今回の調査では、西側部分の柱穴を9基検出した。東西4間(桁行8.0m)以上、南北2間(梁行6.0m)の建物である。国土座標に対する振れは、北に対して西に18.2°である。柱間は桁行が2.4m、梁行が3.0mとみられる。

柱掘方は一辺1.3~1.8mの隅丸方形で、深さ約1.1mである。柱はいずれも抜き取られており、一部の抜き取り埋土より、軒瓦が出土している(図19)。

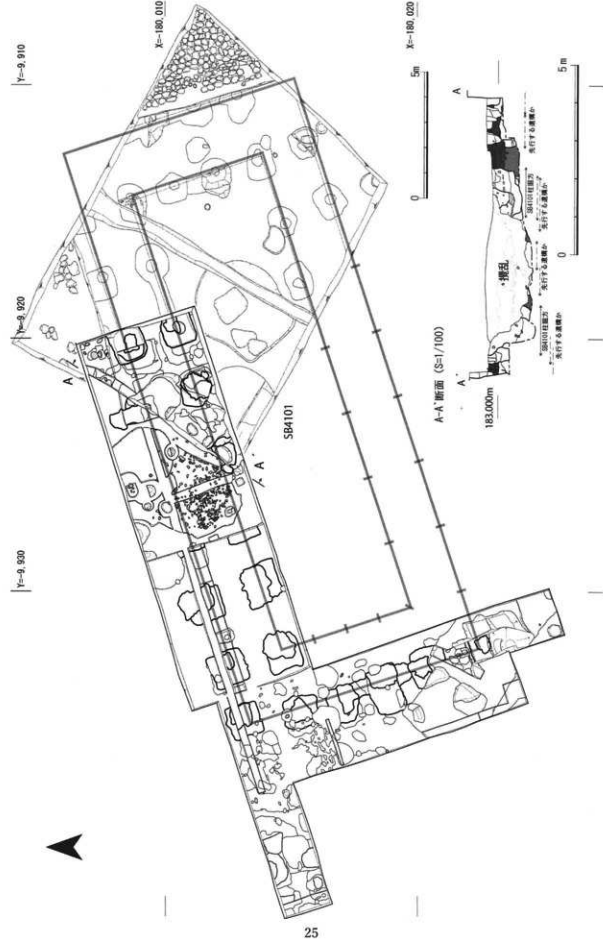
SB7002(図11) 第70次調査第4調査区で検出した掘立柱建物である。SB4101の南約23.0mに位置する。東西2間以上(桁行2.6m以上)、南北2間(梁行5.4m)の建物である。国土座標に対する振れは、北に対して西に18.2°である。柱間は桁行が約2.7m、梁行が2.7mである。

柱掘方は、攪乱等により十分に確認出来なかったものが含まれるが、一辺1.0~1.4mの隅丸方形である。柱はいずれも抜き取られている。遺物は出土していない。

2. 掘立柱塼

SA6801(図12~15) 第69、70次調査で検出した南北方向の塼である。検出した柱穴は13基である。検出位置はSB4101の西側にあたり、SB4101西辺とSA6801との距離は6.0mをはかる。南端はSB4101の南西約6.0mの付近、北端は確認できておらず、第70次調査第5調査区のさらに北へ続く。国土座標に対する振れは、北に対して西に17.8°である。

柱掘方は一辺1.1~1.7mの隅丸方形で、柱間は約2.6mである。南北23間以上で、検出した総延長は60m以上と推定される。柱はすべて抜き取られている。遺物は出土していない。



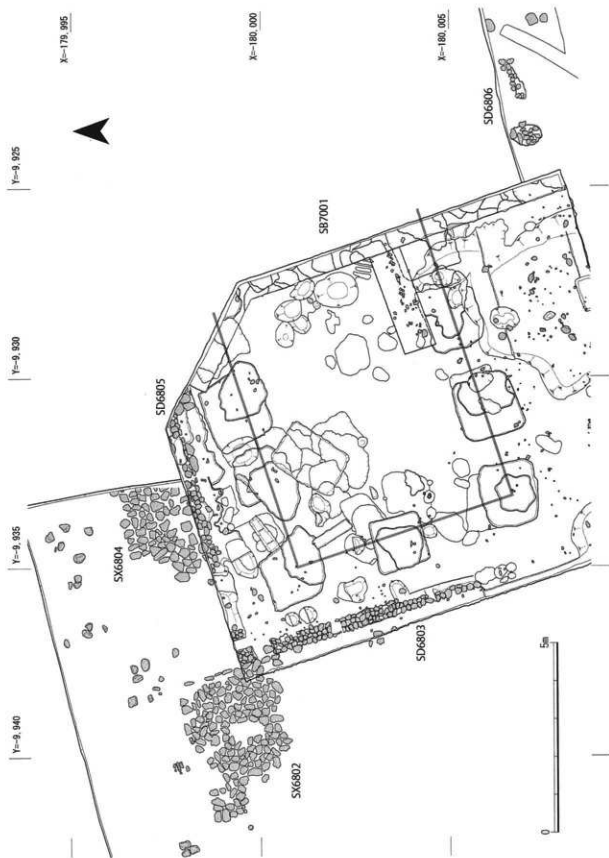


図10 SB7001等平面図(第68次調査第1調査区北東部および第70次調査第2調査区合成図、S=1/100)

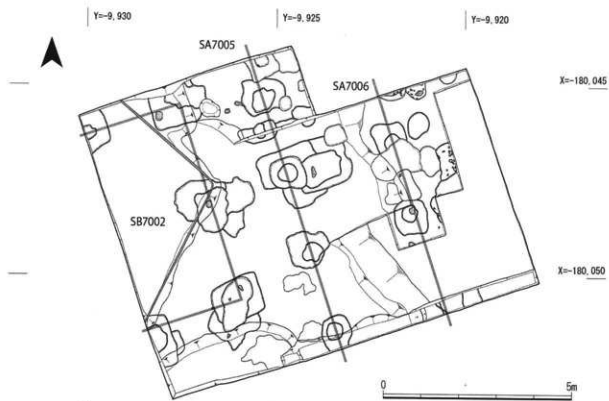


図11 SA7002、SA7005、SB7006平面図(第70次調査第4調査区、S=1/100)

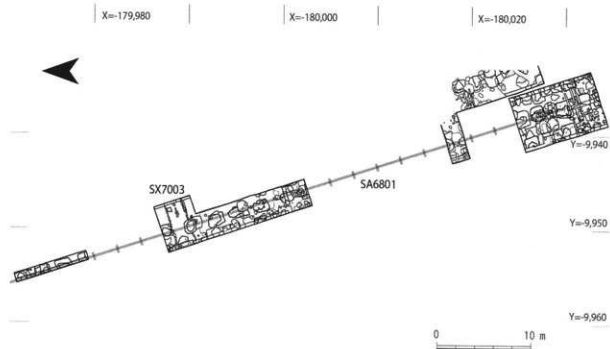


図12 SA6801平面図(第69次調査区および第70次調査第1・3・5調査区合成図、S=1/400)

SA7005 (図11) 第70次調査第4調査区で検出した南北方向の塼である。前述のSB7002の東側で検出した。SB7002 東辺と SA7005 との距離は2.1mをはかる。今回の調査区内では3間分(5.0m 以上)を検出した。第70次調査第4調査区の北および南へさらに続く。SB7002と平行し、国土座標に対する振れは、北に対して西に 18.2° である。

柱掘方は一辺0.9~1.1mのやや不定形な隅丸方形である。ただし、検出位置が後世に大きく削平を受けていると考えられるため、本来はもう少し大きかった可能性がある。柱はすべて抜き取られている。遺物は出土していない。

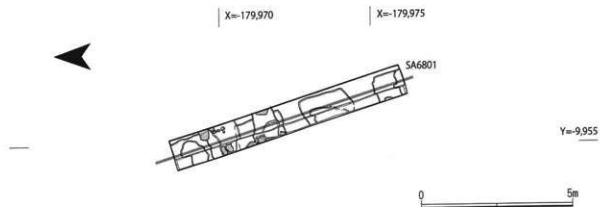


図13 SA6801 平面図 (北部・S=1/125)

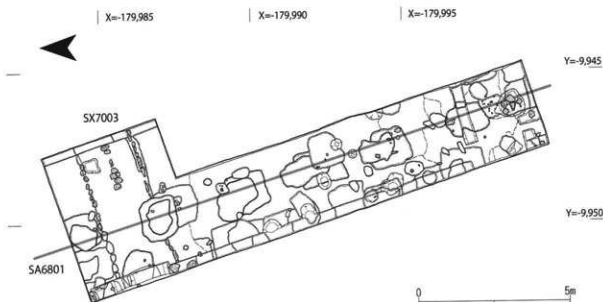


図14 SA6801 平面図 (中央部・S=1/125)

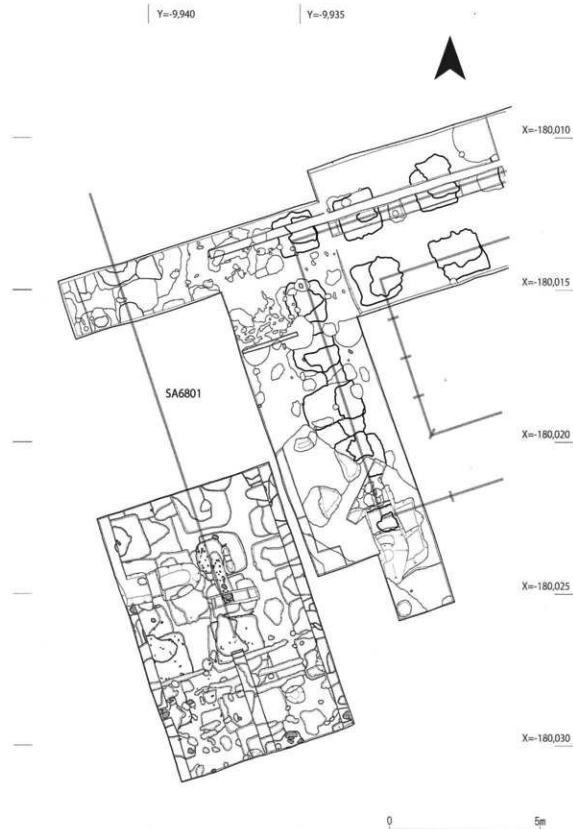


図15 SA6801 平面図 (南部・S=1/125)

SA7006 (図 11) 第 70 次調査第 4 調査区で検出した南北方向の塀である。上述の SA7005 の東側で検出した。SA7005 と SA7006 の距離は 3.0m をはかる。今回の調査では 2 間分 (2.0m) を検出したが、調査区外へさらに続く。SB7002 および SA7005 と平行し、国土座標に対する振れは、北に対して西に 18.2° である。

検出した柱掘方はいずれも一辺約 0.9m の隅丸方形である。ただし、検出位置が後世に大きく削平を受けていると考えられるため、本来はもう少し大きかった可能性がある。柱はすべて抜き取られている。遺物は出土していない。

3. 石組溝

SD3601 (図 16) 第 68 次調査第 2 調査区の中央を東西に横断するように検出した。当該調査区で重複させた第 36 次調査区内で検出されていたものであり、その西側の続きを検出したことになる。大部分の石が削平等の影響で抜き取られており、第 36 次調査時に検出されていた側石は遺存していなかった。今回は、断続的に遺存した底石を検出した。幅は約 45cm、検出長は約 25.0m。国土座標に対する振れは、東に対して北に 18.2° である。

底石は、幅約 20cm の川原石を原則として南北に 2 列、所々で幅約 40cm の川原石 1 石をその長径が溝の向きと一致するように据えている。底石は非常にゆるやかに西へ傾くように配置されており、東から西へ排水する機能をもっていたと考えられる。ただし、底石の直上および周辺まで耕作がおよんでおり、溝内の堆積土などは検出できなかった。

SD6803 (図 10) 第 68 次調査第 1 調査区の東北部付近で検出した。SX6802 南東隅から南へ延びる石組溝である。SX6802 南東隅で後述する SD6805 と接続する。検出長は約 6.6m である。国土座標に対する振れは北に対して西に 18.2° である。

幅は 44~46cm で、長径 10~14cm 大の川原石を 3 列並べ、中央の石はほぼ水平に、東西両隣の石は中央の石に向けて傾くように据えている。石組溝側石上部から底面までの深さは 4~6cm である。なお、SX6802 と接する部分では SX6802 が SD6803 の側石を兼ねている。側石を含めた SD6803 の深さは約 15cm である。

SD6805 (図 10) 第 68 次調査第 1 調査区の東北部付近で検出した。SX6804 に北接する。調査区内では約 6.6m 分を検出したが、調査区外の東に延びる。国土座標に対する振れは東に対して北に 18.2° である。第 1 次調査でも検出されている石組溝である。

幅は約 40cm で、長径 10~20cm 大の川原石を南北 3 列並べ、石の長径を溝と直行するように据える。中央の石はほぼ水平に、東西両隣の石は中央の石に向けて傾くように、それぞれ据える。石組溝底面の深さは約 5cm である。なお、SX6804 と接する部分では SX6804 が SD6805 の側石を兼ねていたとみられるが、残存状況が良好で無いため、側石を含めた場合の深さは確認出来ていない。

SD6806 (図 10) 第 68 次調査第 1 調査区の東側拡張部分で検出した。SB4101 の北側で東西に

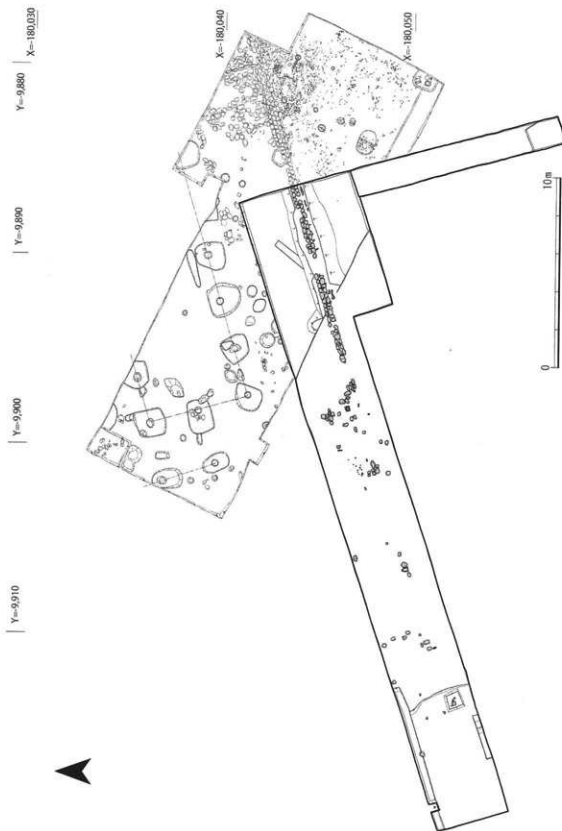


図 16 SD3601 平面図 (S=1/200)

のびる石組溝である。長径 15cm 大の石を 2 列、V 字状にくぼむように並べる。残存状況は極めて悪く、側石の有無や石敷遺構がともなうかどうかは、今回の調査区内では確認できなかった。そのため、石組溝の深さは確認できていない。検出した場所から判断して、第 1 次調査で検出されている東西石組溝の西側延長部分と考えられる。

4. 石敷遺構

SX6701 (図 17) 第 67 次調査第 2 調査区の拡張区で確認した。長径 20~30cm 大の細長い川原石を長軸に 2 列並べて据える。列毎に面の高さが異なり、最大で約 6cm の比高があるため、面の高さが高い方は石敷遺構、低い方は石組溝であった可能性がある。検出位置から、第 1 次調査で検出された「敷石 D 区 第一区西部」の一部の可能性がある。

SX6802 (図 10) 第 68 次調査第 1 調査区の北東部で確認した。南北約 3.8m、東西約 2.8m である。検出位置から、第 1 次調査で検出された石敷遺構とみられる。長径が 20~30cm 大の川原石を用いるが、長径 40cm 大の大型の石も若干用いる。SD6803 および SD6805 と接する部分から北側では、長径 24~30cm 大の細長い川原石を用いる。

SX6804 (図 10) 第 68 次調査第 1 調査区の北西部で検出した。南北幅約 1.9m で東西方向に敷設されており、今回の調査では 2.7m 分を検出した。なお、検出した位置関係から第 1 次調査で検出された石敷遺構にあたり、調査区外の東にさらにのびる。

おおむね長径 24~34cm 大の川原石を用いるが、長径 14cm 大の小型の石や長径 44cm 大の大型の石も若干用いる。SD6805 が南接し、SD6805 の側石を兼ねていたとみられる。

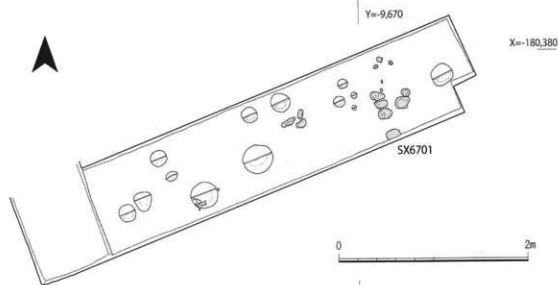


図 17 SX6701 平面図 (S=1/40)

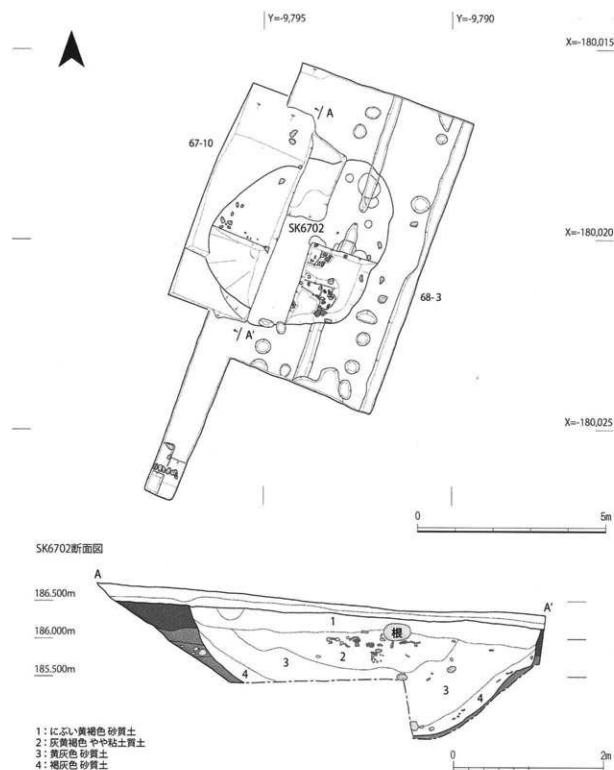


図 18 SK6702 (平面図は S=1/100、断面図は S=1/50)

SX7003 (図 12・14) 第 70 次調査第 1 調査区の北側で検出した。長径 30~50cm 大の川原石を東西 2 列に 1.8m の間隔を置いて東西方向に並べ、その間に 0.5~1cm 大の砂利を敷く。

一部、砂利の上に長辺 40cm 大の川原石を面をそろえて置くことから、この砂利敷は本来、石敷遺構であった可能性がある。また、一部が SA6801 の掘方と重複することから、SA6801 に先行する遺構と考えられる。

5. 土坑

SK6702 (図 18) 第 67 次調査第 10 調査区および第 68 次調査第 3 調査区で検出した、直径約 4.5m の不整形円形を呈する土坑である。深さは約 1.5m をはかり、埋土は大きく 4 層に分けることができる。

1 層は砂質土である。遺物は出土していない。2 層はやや粘土質である。軒瓦、丸瓦、平瓦を多く包含する。3 層は黄灰色で礫を多く含む砂質土である。遺物はほとんど出土していない。4 層は褐灰色で少量の礫を含む砂質土で、わずかがブロック状の黄灰色の砂質土を含む。須恵器や土師器を包含する。3 層と 4 層の埋土の層理面には、華大の礫が多くみられた。

第 3 節 主な出土遺物

ここでは、今回の調査で特に注目される SB4101 に関連して、その評価に資するため、第 69 次調査ならびに第 70 次調査で出土した主な遺物を報告する (図 19)。遺物の器種分類・型式・時期は、次の文献によった。土師器・須恵器は『平城宮発掘調査報告 X V I』(奈良国立文化財研究所 2005) により、適宜、『土器様式の成立とその背景』(西 2008) および『7 世紀の土器 (近畿西部編)』を参照した。軒瓦は『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』(奈良国立文化財研究所 1996) および『平城宮発掘調査報告 X I I I』(奈良国立文化財研究所 1991) によった。

1 は須恵器杯 B 蓋。第 70 次調査第 1 調査区内において、SA6801 の柱抜き取り穴を切る擾乱から出土した。口径 14.6cm。時期は飛鳥時代末から奈良時代前半に比定できる。

2 は須恵器杯 B 蓋。第 70 次調査第 1 次調査区において、SA6801 の柱穴検出時に出土した。口径 22.5cm。時期は飛鳥時代末から奈良時代前半に比定できる。

3 は須恵器甕 C。第 70 次調査第 1 調査区内、西側壁面に設けた断ち割り内の北端部から出土した。口径 35.8cm。飛鳥時代後半から奈良時代に比定できる。

4 は軒丸瓦である。第 70 次調査第 2 調査区において、SB7001 の西側柱の中央にあたる柱抜き取り穴から出土した。瓦当径は 12.8cm、瓦当厚は 4.1cm。瓦当面の文様は、内区が複弁四弁蓮華文で、外区内縁は珠文、外区外縁は線鋸歯文である。外区をめぐる珠文は 12 個、外縁形態は三角縁である。内区の蓮華文の連子が 1 + 6 の二重になるという点から『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』の軒丸瓦 6313 型式に類似し、間弁が独立しているという点からは軒丸瓦 6314 型式に類似する。奈良時代前半に比定できる。

5・6 は軒平瓦である。いずれも第 70 次調査第 2 調査区から出土しており、5 は SB7001 の北側桁行方向の西から 2 目にあたる柱抜き取り穴から、6 は SB7001 の南側桁行方向の柱掘方を覆う擾乱土から出土した。いずれも均整唐草文軒平瓦で同范。瓦当厚は 4.5cm で、段

顎である。瓦当面の文様は、中心飾りはクラブ形の有軸三葉形と上へ巻く唐草で、唐草は三回反転する。第 3 単位の各葉の先端は、主葉と第 1 支葉がともに脇区界線につき、共に巻き込まない。外区は珠文である。『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』の軒平瓦 6685 型式に類似することと顎部の形状から判断して、奈良時代前半に比定できる。

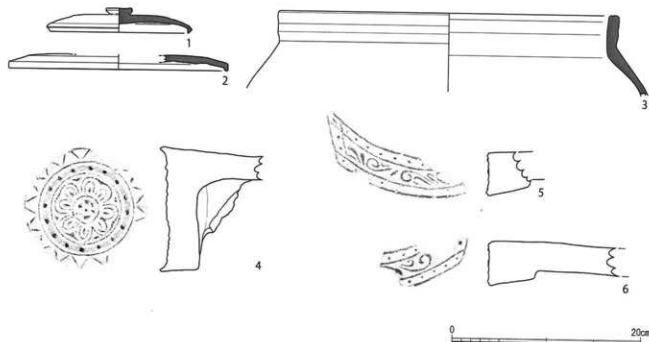


図 19 出土遺物実測図 (S=1/4)

【参考文献】

- 古代の土器研究会 1997 『7 世紀の土器 (近畿西部編)』 古代の土器 5-2
- 奈良国立文化財研究所 (編) 1991 『平城宮発掘調査報告 X I I I』
- 奈良国立文化財研究所 (編) 1996 『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』
- 奈良文化財研究所 (編) 2005 『平城宮発掘調査報告 X V I』
- 西 弘海 2008 『土器様式の成立とその背景』

第4章 まとめ

第1節 SB4101とその周辺の遺構配置の確認と遺構の年代

第1次調査以来検出されてきた、宮滝遺跡における奈良時代の遺構群について、今回改めて調査を行うことができた。従来、この遺構群の広がり、一辺が120～150mの方形区画の中に収まると評価されており（前掲・楠元（編）1996）、吉野町としては調査開始時点で、大型建物や整然とした配置をとる建物群の検出は想定していなかった（吉野町2014）。しかし、本調査でこの認識を大きく改めることとなった。ここでは本調査の成果を改めて整理し、特に注目されるSB4101の事実関係を整理し、宮滝遺跡第67～70次発掘調査概報のまとめに代えたい。

第41次調査で東半部のみが検出され、東西規模が確認できていなかったSB4101だが、第69次調査により桁行9間（東西23.7m）、梁行5間（南北9.6m）の規模であることが確認できた。宮滝遺跡では、これまでの調査でSB4101と造営方位がそろった掘立柱塼や掘立柱建物群が検出されていたが、その中でSB4101は最大の規模をはかる。また、SB4101は古代において格式の高い建物とされる四面雨付建物（家原2012、箱崎1997、宮本1974など）であることを確定させることができた。

その後、第70次調査第2調査区において、SB4101と造営方位をそろえるSB7001の西半部を検出した。SB7001はSD6803やSD6805により方形に区画された範囲内に位置する。SB7001の東側延長部には第1次調査で南北方向の石組溝が検出されており（末永1944）、この石組溝がSB7001の東側を区画するものとみられる。今回の調査で第1次調査の記録精度が極めて高いことが確認できたため、その成果を参照すると、SB7001の東側を区切る石組溝は、SD6803の東約18.0m地点とみられる。SB7001の桁行の柱間は2.4mであり、SB7001とSD6803との間が約1.2m離れていることを勘案すると、SB7001は桁行7間（約16.8m）の建物と想定できよう。この想定通りだとすれば、SB7001の中軸線はSB4101の南北中軸線と一致する。ただし、『宮瀧の遺跡』（末永1944）ではSB7001の南東隅と重複する位置に石敷遺構が報告されている。この重複関係については、今後の調査で確認する必要がある。

また、SB4101の南側でも南北中軸線を基準としてSB3602の東西対称となる位置にSB7002を検出した。これらの成果から、本調査地ではSB4101を中心として、東西対称となるように建物群が配置されていたと考えられる。

今回の調査ではSB4101などの年代を決定する遺物の出土はみられなかった。しかし、SB4101と造営方位をそろえる建物群などに注目すると、第23次調査（前掲・楠元1981）で検出された石組溝から、奈良時代の軒丸瓦が出土しており、第38次調査（前掲1990）で検出された掘立柱塼SA3807の柱掘方内から平城宮土器Ⅱ期の須恵器が出土している。これらの遺構はSB4101と造営方位をそろえることから、SB4101およびその周辺の遺構群の造営時期についても奈良時代前半と考えたい。

第2節 想定される旧地形と石組溝による排水の方向

今回の発掘調査で確認した古代の遺構検出面の標高（図22）を参考に、第3章第1節で分類したエリアを用いて当該地の旧地形の復元を試みる。なお、川側への落ち込みが激しい南

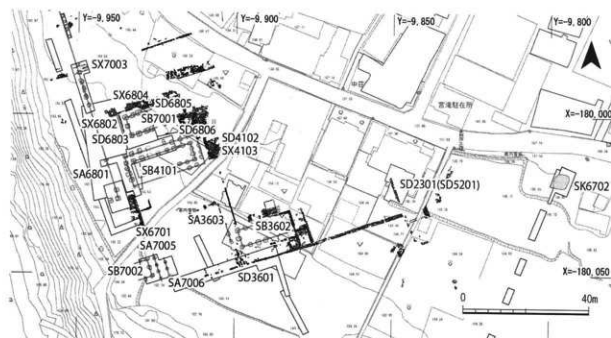


図20 宮滝遺跡における古代の遺構分布（S=1/1,200） 図1

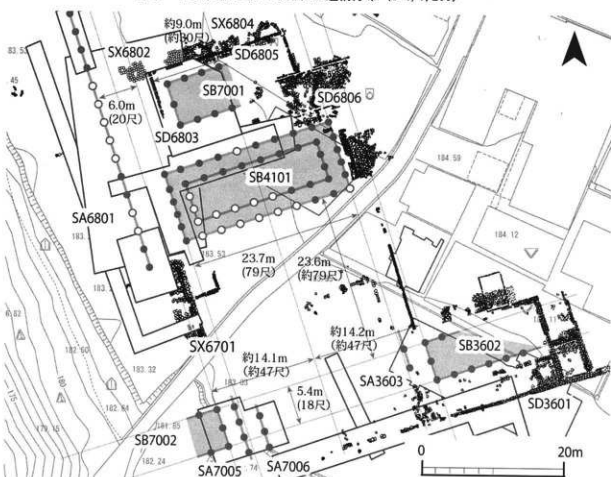


図21 今回の調査で確認したSB4101周辺の遺構配置図（S=1/500） 図1

西部エリアについては除外する。

今回の調査地は大きく見て、上位段丘面と下位段丘面の2つに分かれる。上位段丘面にあたるのは北東部エリアのみである。なお、既往の調査を確認すると、第52次調査北側調査区が地表直下で地山となり、段丘礫層が確認できたと報告されている(前園・橋元(編)1996)。第52次調査南側調査区ではこの様子が確認できず、下位段丘面にあたるとみられることから、今回の調査区の北東部エリア南端部と第52次調査区の2つの調査区の間を結ぶラインが河岸段丘崖として想定できるだろう。また、その西側延長線上およそ50mの地点で、比高約2mの石積みをもたぬ段差が現況で確認できる。この段差も、その位置関係から河岸段丘崖にあたると考えたい(図23)。

続いて、調査区のほぼ全体が該当する下位段丘面についてみていく。西部、および東部エリアでは、北から南にむけて2~3%の勾配でゆるやかに傾斜する傾向がみてとれた。東西方向にはほとんど傾斜がみられないが、わずかに西側が低くなるようである。中央部エリアでは古代の整地の様相が後世の耕作のため不詳という問題があるが、北側の河岸段丘崖想定ラインから南側の吉野川にむけて、緩やかに傾斜する自然地形を活かして、古代に整地がなされたものと想定できよう。今回の調査地の現況地表面には微小な段差が散見できるが、古代の地形を反映したものではなく、後世の耕作による改変であろう。

また、古代の遺構検出面の傾斜で特筆されるのは、SB4101を検出した地点である。今回整理した結果では、この地点でのみ、ほとんど傾斜が確認できなかった。前節で確認したように、SB4101は周辺の遺構を配置する際の基準であった可能性が高い。古代における中心的な建物として、SB4101周辺は特に丁寧な整地がなされたと考えられる。

さてこの地形で、排水はどのようになされていたのだろうか。石組溝の底石の比高を参考に、排水の方向を確認する。今回の調査地および既往の調査地で検出された石組溝は、全部で7条ある。これらの溝の方向や排水方向を整理したものが表1である。なお、石組溝の底石には川原石が用いられているため、計測する地点などで勾配の数値は若干変化する。そのため、勾配の計算はおおよその数値であることを断っておく。

表1 確認されている石組溝と勾配から推察される排水方向

遺構名	溝の方向	排水方向	おおよその勾配	参照した調査
SD3601	東西溝	東から西へ	1.1~1.5%	第68次
SD6805	東西溝	東から西へ	3.0%	第70次
SD6806	東西溝	(東から西か)	計測不能	第68次
SD6803	南北溝	北から南へ	3.0%	第70次
SD2301	南北溝	北から南へ	5.0%	第23・52次
SD4102	南北溝	南から北へ	1.3%	第41次
SD5801	南北溝	北から南へ	2.0%	第58次

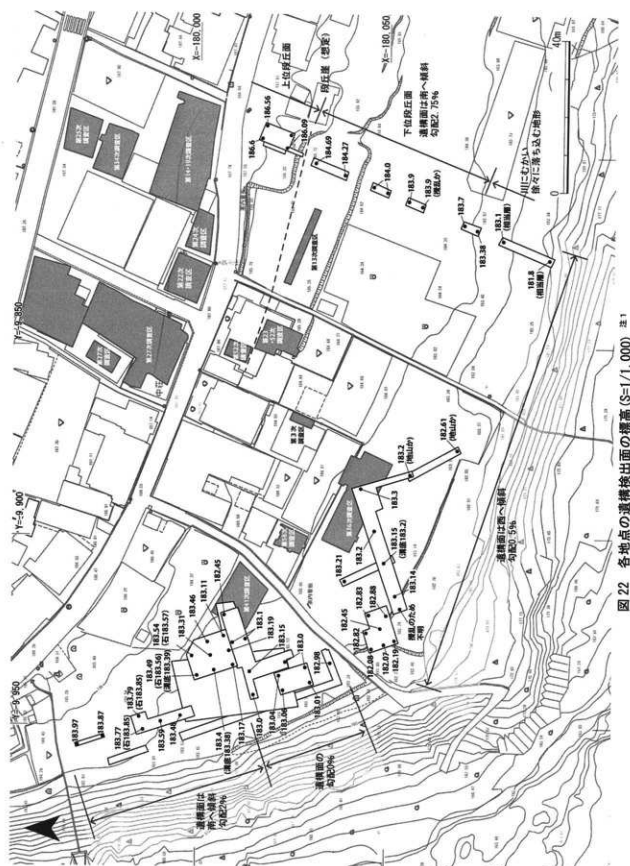


図22 各地点の遺構検出面の標高(S=1/1,000) 注1



図 23 石組溝の勾配にみる排水の方向 (S=1/1,000) 表1

表1を参照すると、南北溝は北から南に、東西溝は東から西に排水していることがうかがえる。流末などの様子が確認できていないが、川側へ排水していたと考えられる。

ただし、SD4102のみ異なる傾向を示している点は注目される。SD4102はSB4101の東側に隣接する石組溝である。この石組溝のみ、北側へ排水する南北溝となっている。SB4101の南側に排水したくなくった意図が伺える。SB4101の南側に重要な遺構があったか、またはSB4101の南面を保護すべき理由があったものと考えられる。SB4101南側の様相を確認するこ

ともまた、今後の課題である。

第3節 SB4101について

第1節で確認したように、今回の調査ではSB4101の西側を検出することで、この建物が桁行9間、梁行5間の四面廊付建物であることを確認した。また、SB4101を中心に東西対称となるように建物が配置されていたことを確認した。ここでは、建物を評価するにあたり、奈良時代を中心に、SB4101と同じ桁行9間、梁行5間の建物の類別を確認する。

奈良時代前半の遺構として報告されている桁行9間、梁行5間の建物を表2に整理した。この表を確認すると、桁行9間、梁行5間となる建物は、平城宮大極殿院の後殿、平城宮内裏の正殿または後殿などに限られる。SB4101の場合、その北側にSB7001が検出されている一方、南側では遺構が確認できていない。SB4101は類別を参照するかぎり平城宮内裏の正殿に相当する性格の建物と評価できよう。

当該時期に、吉野にはどのような官殿または官衙があったのだろうか。『日本書紀』や『続日本紀』、『万葉集』によると、この時期の吉野では、元正天皇や聖武天皇の行幸があった吉野宮が存在していたことが分かる。そのほか、『続日本紀』和銅四年四月甲申条に記述のある吉野郡、同天平五年正月丙寅条に記述のある吉野監が史料にのこる。こうした施設と、宮滝遺跡との関係について、前項までで確認した条件をもとに検討する。

監は離宮の事務を行ったと考えられている施設（滝川1941）で、吉野のほかには和泉監しかなく、その詳細な建物配置などは現時点でわからず。監が「国に準じる行政単位とされる」（青木ほか（校注）1990）と評価されていることを考えれば、国庁との比較が参考にはなるだろうが、今後の研究をまちたい。

従来指摘されていた吉野宮の可能性だが、SB4101の類別が内裏の正殿に相当する施設であること、建物配置の類別として内裏があげられることを考えると、現時点では監よりも蓋然性が高いと考えたい。吉野宮は聖武天皇の行幸があったことが『続日本紀』に記されているが、現在確認されている遺物の年代からみても矛盾しない。

なお、SB4101を離宮の正殿と考えた場合、SB4101周辺で出土している軒瓦が『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』の軒丸瓦6313型式と軒平瓦6685型式に類似している点は注目できる。軒丸瓦6313型式と軒平瓦6685型式はいずれも平城宮跡内裏で出土しており、組み合わせることが指摘されているためである（奈良国立文化財研究所（編）1996）。SB4101を吉野宮跡とみた場合、こうした瓦の存在は、遺跡の性格を考える上で非常に示唆的といえる。

表2 主に奈良時代に確認されている桁行9間・梁行5間の規模をもつ主な建物 注2

遺跡名	時期	遺構名	大きさ	備考
宮滝遺跡	奈良時代前半	SB4101	23.7m×9.6m	
平城宮大極殿院（中央区）	第Ⅱ期（聖武期）	SB7150	26.8m×15.0m	後殿
平城宮内裏	第Ⅱ期（聖武期）	SB4703A	26.68m×11.86m	正殿
平城宮内裏	第Ⅱ～Ⅲ期（聖武期～孝謙上皇以前）	SB450A	26.9m×14.8m	正殿

第4節 今後の課題

今回の調査では奈良時代前半の宮滝遺跡の中心的な建物の規模と構造、建物配置などについて確認することができた。同時に、遺構の詳細な位置情報や遺構配置、各地点の遺構検出面の標高が確認できたことで、整備にあたっての留意点も確認でき、今後の整備方針を更新することができた。一方で、いくつかの課題も新たに生じた。すでに本文中でふれたものもあるが、今後の本報告にむけた整理作業、および今後の調査への留意点として、以下に課題を整理しておきたい。

まず、SB4101などに先行する遺構についてである。今回の調査では、同一遺構面でSB4101やSA6801などの一部の柱掘方に、先行する柱掘方の可能性がある遺構を検出した。なお、いずれの遺構についても部分的な検出であるとともに掘削を行っておらず、遺物も確認できていないため、年代や性格は特定できていない。下層に弥生時代以前の遺構面が確認できるかどうかも含め、SB4101以前の様相についての情報が、今回の調査地内では不十分であることが明らかになった。

宮滝遺跡における既往の調査を確認すると、第27次調査において、SB4101と軸がそろったSA2703とSA2704が重複して検出されている。従来これらの遺構群は「一部の例外を除けば、大部分に建て替える痕跡もなく、短期間に機能していた施設との見方ができる」(前掲・楠元(編)1996)と評価されていたが、今後の調査では先行する遺構の存在を考慮する必要がある。

二点目は、遺構の広がりをも十分に確認できなかった点である。例えば、今回の調査ではSA6801の北端を確認することができなかった。このため、SA6801がSB4101などをどの程度の規模で区画していたか確定できなかった。

また、石組溝SD3601の流末が確認できなかったことも、SB4101存続時における排水の在り方などを十分に把握できなかった点で課題がこる。同時に、今回の調査地外にはなるが、第1次調査では上位段丘面とみられる場所でも石組溝などが検出されており、下位段丘面でも確認している遺構との接続などがどのようになされていたかが不明確である。また、一部の遺構について『宮滝の遺跡』(末永1944)で報告されている遺構との重複関係も留意が必要である。古代における宮滝遺跡の遺構の分布や、当時の土地利用の状況について把握するためにも、今後の調査で確認する必要がある。

最後は、今後、遺構の検出が期待される場所が整理できた点である。たとえば、SB4101周辺の建物配置が明らかになったことで、SD3601の南側に門跡の検出が期待できるようになった。また、SB4101の南側やSB7001の北側などにも遺構が検出できる可能性が明らかになった。これらが明らかになれば、より詳細にSB4101周辺の様相を評価できるだろう。

【注釈】

注1 下図には吉野町教育委員会が平成30(2018)年に作成した宮滝の地形測量図を用いた。

注2 表の作成にあたっては、下記の文献を参照した。

家原圭太 2012『都城と周辺地域の四面廂建物』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所(編)

『四面廂建物を考える』報告編、クバプロ

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所(編)2012『四面廂建物を考える』資料編、クバプロ

鈴木一義 2014『近畿地方における長舎の出現と展開』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所(編)『長舎と官衙の建物配置』報告編、クバプロ

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所(編)2014『長舎と官衙の建物配置』資料編、クバプロ

なお、各建物の年代について各資料で異なる場合がみられたが、『四面廂建物を考える』資料編、

『長舎と官衙の建物配置』資料編に記載された年代を優先した。

【参考文献】

青木和夫ほか校注 1990『補注11-二七 芳野監』『続日本紀二』新日本古典文学大系13、岩波書店

家原圭太 2012『都城と周辺地域の四面廂建物』(独行) 国立文化財機構奈良文化財研究所(編)『四面廂建物を考える』報告編、クバプロ

末永雅雄 1944『宮滝の遺跡』奈良県教育委員会

滝川政次郎 1941『芳野和泉二監考』『日本法制史研究』雄斐閣

奈良国立文化財研究所(編)1991『平城宮発掘調査報告XIII』

奈良国立文化財研究所(編)1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』

箱崎和久 1997『東院西辺部の調査—第270次』『奈良国立文化財研究所年報1997-III』奈良国立文化財研究所

前掲実知雄 1990『吉野町宮滝遺跡発掘調査概報—第37.38.39次調査—』奈良県立橿原考古学研究所(編)『奈良県遺跡調査概報(第一分冊)1987年度』

前掲実知雄・楠元哲夫(編)1996『宮滝遺跡(遺構編)』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告71、奈良県立橿原考古学研究所

前掲実知雄・楠元哲夫 1981『吉野町宮滝遺跡発掘調査概報 第54次〜1次〜第54-4次調査』奈良県立橿原考古学研究所(編)『奈良県遺跡調査概報(第二分冊)1979年度』

宮本長二郎 1974『尺度と建築』『古代史発掘9 堀もれた宮殿と寺』講談社

吉野町 2014『吉野万葉整備活用計画基本構想』

吉野町 2020『吉野万葉整備活用基本計画』



1 遠景 (南から)



2 第1調査区 (上が北西)



3 第2調査区（上が北）



4 第3調査区（南東から）



5 遠景（北から）



6 調査区全景（上が北西）



7 SB4101 (北西から)



8 調査区 (東から)



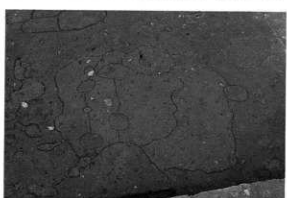
9・10 SB4101 柱穴検出状況 (旧・第 41 次調査区内、東・北東から)



11 SB4101 柱穴検出状況 (旧・第 41 次調査区壁面、南東から) 12 SB4101 北側柱列検出状況 (南西から)



13 拡張区 (北から)



14 SB4101 北西部柱穴検出状況 (南から)



15 拡張区 (南から)



16 SB4101 南西隅柱穴検出状況 (南から)



17 遠景 (南から)



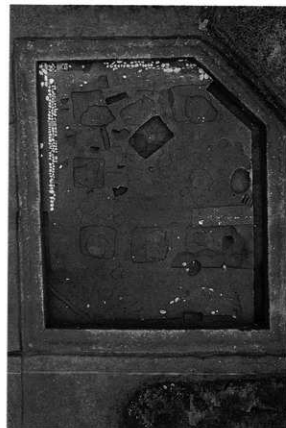
18 全景 (上が西南西)



19 第1調査区全景 (北から)



20 第3調査区 (南から)



21 第2調査区全景 (上が北)



22 第2調査区 石組溝 (北から)



23 第2調査区 柱穴断面 (南から)



24 第4調査区全景 (西から)



25 第5調査区全景 (上が南南西)



27 須惠器杯B蓋 (図 19- 2)



29 軒丸瓦 (図 19-4)



31 軒平瓦 (図 19-6)



32 参考 宮滝遺跡第1次調査出土軒丸瓦・製作
痕跡等の確認できる資料
(左・瓦頭部と丸瓦の接合方法、右・范への粘土
詰め込み時の指圧痕)

[illegible]